

バーガ森北斜面遺跡

-伊野町南地区基幹農道整備事業に伴う発掘調査報告書-

1999・3

高知県伊野町教育委員会

バーガ森北斜面遺跡

-伊野町南地区基幹農道整備事業に伴う発掘調査報告書-

1999・3

高知県伊野町教育委員会



調査区全景（航空写真）



ST-1, ST-2



出土遺物 弥生土器（壺）



出土遺物 弥生土器（壺）



出土遺物 弥生土器（壺）



出土遺物 弥生土器（壺）



出土遺物 石包丁



出土遺物 石錐

序

伊野町にはバーガ森北斜面遺跡をはじめとして、古墳群や城跡など県内の重要な遺跡が数多く所在しています。

昭和32年に発見されたバーガ森北斜面遺跡は、昭和49年、51年の2回にわたり伊野町教育委員会によって学術調査が行われ、竪穴住居址3棟と多くの弥生時代中期後半の土器が出土しました。その竪穴住居址は町の指定文化財になっています。

今回の発掘調査は、伊野町南地区基幹農道整備事業に伴う緊急発掘調査であり、平成4年度の試掘調査は高知県教育委員会が、平成8年度の試掘調査、同9年度の本発掘調査は伊野町教育委員会が主体となって実施しました。その結果、弥生時代中期後半を中心に約5000点に近い遺物が出土し、遺構についても竪穴住居址2棟を含む重要なものを検出することができ、仁淀川流域の歴史を解明する上で貴重な資料が得られました。

この報告書によって、町民の方々の埋蔵文化財に対するご理解と関心が一層高まりますことを願うとともに、今後における教育・研究活動などの文化財保護の一助となることを期待するものであります。

最後に、調査にご協力くださった地域住民の方々、また、ご指導いただいた高知県教育委員会、(財)高知県埋蔵文化財センター、そして文化財へのご理解とご協力をいただいた中央耕地事務所の方々に心より深く感謝申し上げます。

平成11年3月

伊野町教育委員会

教育長 浜田 啓

例　　言

1. 本書は、伊野町が高知県の委託を受け、平成9年度に実施したバーガ森北斜面遺跡の発掘調査報告書である。

2. 発掘調査は、高知県教育委員会並びに高知県文化財団埋蔵文化財センターの指導のもとに伊野町教育委員会が調査主体となり実施した。

3. 調査体制

調査員	伊藤　強	高知県文化財団埋蔵文化財センター	主任調査員
	吉良　淳	伊野町教育委員会	平成9年度嘱託職員
	福井　清子	伊野町教育委員会	平成10年度嘱託職員
庶務	増田　麻利	伊野町教育委員会	社会教育主事

4. 本書の執筆、編集等は伊藤強が行った。

5. 本書に用いた遺構の記号は以下の通りである。

SK 土坑 ST 竪穴住居址 P ピット

6. 遺物についてはすべて縮尺1/4で実測図を掲載した。出土遺物は整理作業の後、伊野町教育委員会で保管している。

7. 調査に当たっては、関係各位及び、地元住民の方々にご理解、ご協力をいただいた。また、現場作業、整理作業では下記の方々に従事していただいた。記して敬意を表したい。

(測量補助員) 鎌田 優彰

(現場作業員) 新谷 栄吉, 中島 繁, 小島 忠夫, 尾崎 久子, 傍士 郁子

仙頭 洋子, 吉井 裕子, 本山 みどり, 吉本 善子, 村田 一仁

(整理作業員) 福井 匡子, 岛中 順子

8. 遺物写真撮影及び、報告書執筆においては、埋蔵文化財センター廣田佳久第4班長のご協力を得た。また、同センターの諸氏からは貴重な助言をいただいた。整理作業においては、第4班技術補助員・整理作業員の方々のご協力を得た。記して感謝の意を表したい。

本文目次

第Ⅰ章 調査の契機と経過

1. 契機と経過	1
2. 日誌抄	2

第Ⅱ章 遺跡の概略及び、地理的歴史的環境

1. 遺跡の概略	5
2. 地理的環境	6
3. 歴史的環境	8

第Ⅲ章 調査の概要

1. 調査の方法	11
2. I区の調査	13
(1) I-A区の調査	13
(2) I-B区の調査	14
(3) I-C区の調査	19
(4) I-D区の調査	20
3. II区の調査	22
(1) II-A区の調査	22
(2) II-B区の調査	31
(3) II-C区の調査	35
(4) TR-1・2の調査	35

第Ⅳ章 まとめ

1. 遺物	37
2. 遺構	37
3. 本遺跡の性格	38

付編 1 バーガ森北斜面遺跡出土石製品に関する岩石学的見解

福井清子

付編 2 バーガ森北斜面遺跡から出土した炭化物の年代と樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社

挿 図

- Fig. 1 伊野町位置図
Fig. 2 遺跡周辺図
Fig. 3 伊野町現況図
Fig. 4 周辺の遺跡分布図
Fig. 5 調査区位置図
Fig. 6 調査区設定図
Fig. 7 I-A区東壁セクション図
Fig. 8 I-A区出土遺物実測図
Fig. 9 SK-1
Fig.10 I-B区南壁セクション図
Fig.11 I-B区出土遺物実測図 1
Fig.12 I-B区出土遺物実測図 2
Fig.13 I-B区出土遺物実測図 3
Fig.14 I-C区西壁セクション図
Fig.15 I-D区出土遺物実測図
Fig.16 I-D区出土遺物実測図
Fig.17 II-A区南壁セクション図
Fig.18 II-A区出土遺物実測図
Fig.19 II-A区出土遺物実測図
Fig.20 ST-1
Fig.21 ST-1出土遺物実測図 1
Fig.22 ST-1出土遺物実測図 2
Fig.23 ST-1出土遺物実測図 3
Fig.24 ST-2
Fig.25 ST-2出土遺物実測図
Fig.26 II-B区西壁セクション図
Fig.27 II-B区出土遺物実測図 1
Fig.28 II-B区出土遺物実測図 2
Fig.29 II-B区出土遺物実測図 3
Fig.30 II-C区上段北壁セクション図
Fig.31 II-C区下段北壁セクション図
Fig.32 TR-1東壁セクション図
Fig.33 TR-2東壁セクション図

図 版

卷頭図版 1 調査区全景（航空写真）

ST-1, ST-2

卷頭図版 2 出土遺物 弥生土器（壺）

出土遺物 弥生土器（壺）

卷頭図版 3 出土遺物 弥生土器（甕）

出土遺物 弥生土器（甕）

卷頭図版 4 出土遺物 石包丁

出土遺物 石錘

PL. 1 I - A区より北西方面を望む

I - A区より北東方面を望む

PL. 2 I 区遠景

調査区全景（航空写真）

PL. 3 ST-1完掘

ST-2完掘

PL. 4 I - A・B・C区掘削状況

PL. 5 I - C・II - A区掘削状況

PL. 6 II - A・B区掘削状況

PL. 7 II - C区調査前、遺物出土状況

PL. 8 遺物出土状況

PL. 9 弥生土器（壺・高杯）

PL. 10 弥生土器（甕）・石錘

PL. 11 弥生土器（壺）

PL. 12 弥生土器（壺）

PL. 13 弥生土器（壺）

PL. 14 弥生土器（甕）

PL. 15 弥生土器（高杯）・土師器（杯）・須恵器（壺）・石包丁

PL. 16 石製品

PL. 17 作業に携わった方々、作業風景

第Ⅰ章 調査の契機と経過

1. 契機と経過

バーガ森北斜面遺跡発掘調査は伊野町南地区基幹農道整備事業に伴う緊急発掘調査として、平成4年度、同8年度に試掘調査を実施し、平成9年度本調査を行った。

伊野町南地区は、伊野町でも屈指の優良農地を擁し、野菜、果樹を中心とした複合經營を中心に、熱心な農業經營が展開されている。しかしながら、地区内の道路は主に東西に発達し、南北道路は未整備である。これが地域農業発展を阻害する大きな要因となっている。このため幹線農道を整備することにより、農産物の輸送の合理化を図り、農業經營の近代化と農業活動の選択的拡大を図るとともに、地域の發展に資するものとして、当事業を行うこととなった。

当該工事区域内には、昭和32年に本遺跡が発見されており、工事により影響を受ける部分について、平成5年1月18日～2月4日、同8年10月28日～11月22日に試掘調査を実施した。その結果、奥名橋南の山部及び、その山を東に降りた谷部に遺構、遺物の広がりを確認し、本調査に至った。

本調査は伊野町が高知県（中央耕地事務所）の委託を受け、伊野町教育委員会が主体となり、高知県教育委員会並びに高知県文化財団埋蔵文化財センターの指導のもとに実施した。調査面積は814m²、調査期間は平成9年6月10日より同年10月3日までであった。



Fig.1 伊野町位置図

2.日誌抄

- 1997年6月9日から10月3日
- 6.9 本日より調査開始の予定であったが、雨天のため作業を中止する。
- 6.10 作業用器材を現場事務所に搬入し、作業を開始する。I区の北斜面下には民家があり、土砂の崩落が心配される。また、I区南、未買収地の立木にも落石が予想されるため、調査区の南北に木の端材を仮設して土留めとした。I区調査前の状況を写真撮影する。
- 6.11 雨天のため作業中止。
- 6.12 I-A区の調査前風景を撮影し、表土を除去する。昨年度の試掘トレレンチも掘削する。
- 6.13 I-A区の調査を続ける。遺物包含層を掘削する。遺物は細片のみの出土である。
- 6.16 I-A区試掘トレレンチに土坑を検出する。埋土には炭化物及び土器細片が多く混ざる。
- 6.17-18 I-A区と併行して、I-B区の調査を開始する。抜根及び表土除去。
- 6.19 I-B区遺物包含層より弥生土器が出土する。遺構は検出できず。
- 6.20 I-B区は引き続き、包含層を掘削する。やはり、遺物の出土が多い。
- 6.23 雨天のため作業中止。
- 6.24 I-A区は遺構を掘削し、写真撮影、図面作成を行う。I-B区は相変わらず、遺物の出土が多い。
- 6.25 I-A区完掘写真を撮影し、調査を終了する。
- 6.26 I-B区と併行して、I-C区の掘削を始める。I-C区は径30cm大の根が多く、抜根に手間取る。
- 6.27-30 I-C区、抜根、表土除去続く。
- 7.1 I-B区、完掘写真を撮影し、調査を終了する。I-C区は抜根、表土除去続く。
- 7.2 雨天のため作業中止。
- 7.3 I-C区、抜根、表土除去続く。
- 7.4 Ⅲ層より若干の遺物の出土を見る。
- 7.7 雨天のため作業中止。
- 7.8 I-C区を続けて調査する。9:30頃より小雨があり、様子を見る。10:30本日の作業を中止する。
- 7.9-11 雨天のため作業中止。
- 7.14 I区からII区への仮設道を設ける。II区の調査前風景を撮影する。I-C区は調査続くが、出土遺物は少ない。
- 7.15 I-C区は南部を残して、都合により一旦調査を中止し、II区の掘削に入る。II区は谷部で、廃土の処理が困難である。II-C区は昨年度の試掘の際には、遺物・遺構は皆無であったので、廃土置き場とするため、先に調査を済ませることとする。II-C区下段の抜根



I区遺景



遺跡発掘体験学習（伊野町公民館主催）

- 及び、表土除去を行う。
- 7.16 引き続き II-C区下段の抜根及び、表土除去。
- 7.17 雨天のため作業中止。
- 7.18 II-C区下段は、遺物・遺構もなく、調査を終了する。
- 7.22 II-A区、B区の調査を併行して始める。II-A区は竹林であるため、抜根が非常に困難である。
- 7.23~25 II区、抜根続く。
- 7.28 雨天のため作業中止。
- 7.29 抜根と併行して、II-A区、B区共に昨年度の試掘トレレンチを掘削する。
- 7.30 抜根続く。II-B区は表土の除去が終わる。II-A区は試掘トレレンチの最下層に遺構検出。
- 7.31 本遺跡で、遺跡発掘体験学習（伊野町公民館主催）が行われる。町内の児童及び、保護者を対象に本遺跡を紹介し、発掘調査を体験してもらう。
- 8.1 II-A区、B区で作業を続ける。
- 8.4 II-A区、試掘トレレンチを広げる。遺構は南北5.6mの楕円形を呈す。住居址の可能性あり。遺構検出状況を写真撮影する。14:30より降雨のため現場作業を中止する。
- 8.5 II-B区は古代の包含層掘削が終了し、弥生の包含層に移る。弥生土器片、石包丁等が出土する。II-A区でも弥生土器が大量に出土

する。15:30より降雨のため現場作業を中止する。

- 8.6 雨天のため作業中止。
- 8.7~8 II-A区、B区の作業を併行して進める。
- 8.11 II-C区下段には、これ以上廃土が置けなくなったため、II-A、B区は一旦調査を中止する。II-C区上段を新たに廃土置き場とするため、先に調査する。II-C区は、作業員全員は入れないので、一部の作業員は I-C区南部の調査を行う。
- 8.12 雨天のため作業中止。
- 8.13~15 II-C区上段の調査を行う。一部作業員は I-C区南部の調査を行う。
- 8.18 雨天のため作業中止。
- 8.19 II-C区上段は、遺物・遺構なく調査終了。
- 8.20~22 I-C区南部の調査を続行する。
- 8.25 I-C区南部の調査を続行する。
- 8.26 I区とII区を結ぶ仮設道を補修。I-C区南部の調査は続行する。併行して I-D区の調査に入る。
- 8.27 I-C区南部、完掘写真を撮影し調査終了。
- 8.28~29 I-D区の調査を行う。
- 9.1 II区の調査を再開する。I-D区も併行して調査するが、作業員2名程で行う。
- 9.2~5 II区の調査を行う。併行して I-D区も調査する。



I-A区より北を望む



記者発表

- 9.8 雨天のため作業中止。
- 9.9 II-A区はST-1を、II-B区は弥生包含層を掘削する。
- 9.10 ST-1より多量の弥生土器出土。II-B区、完掘写真を撮影し、調査を終了する。
- 9.11・12 II-A区ST-1とI-D区の調査を行う。
- 9.16 台風のため作業中止。
- 9.17 伊野町文化財調査委員会が本遺跡を来訪。案内する。
- 9.18 ST-1床面に土坑検出。埋土には炭化物、土器細片多く含む。炉跡か。
- 9.19 ST-1及びI-D区の調査を行う。ST-1床面にピット数個検出。
- 9.22 ST-1床面にST-2検出。I-D区の調査を終了。
- 9.24 ST-1完掘する。
- 9.25・26 都合により、現場作業を休みにする。
- 9.29・30 ST-2を掘削する。
- 10.1 ST-2完掘。II-A区完掘写真を撮影する。航空撮影、航空測量を実施する。
- 10.2 雨天のため作業中止。中央教育事務所管内の社会教育主事が本遺跡見学のため来訪する。
- 10.3 再度ST-1、2の完掘写真を撮影し本発掘を終了する。
- 10.9 午前11時より記者発表を行う。
- 10.11 午後1時より、現地説明会を行う。



現地説明会1



現地説明会2

第Ⅱ章 遺跡の概略及び、地理的歴史的環境

1. 遺跡の概略

本遺跡は1957年（S.32）に発見された弥生時代中期末の高地性集落遺跡である。

高知市方面から、国道33号線を西に走り、蛭内坂を下って伊野町に入る。南に広がる田園地帯の先には、こんもりと繁るバーガ森が見渡せる。JR伊野駅からは南東の方角に位置し、森の北斜面一帯が本遺跡の範囲である。

現在までに、1974年（S.49）、1976年（S.51）と2度に渡る学術調査が行われており、3棟の半平地半堅穴住居址が検出されている。出土する土器は弥生時代中期末に属するもので、いわゆる神西式土器として西南四国を中心に分布するタイプであり、四線文土器を伴う。石製品は石包丁、叩石、打製石鎌、投弾等バラエティーに富んでいる。

遺跡の範囲は東西約450m、南北約300mと広く、一番大きな谷である菖蒲谷を挟んで、東側の三世庵、新崎、西側の岩神、岩神の上、岩神洞穴、奥名などの地点で遺物が確認されている。しかし、遺跡の中心は菖蒲谷周辺と考えられ、検出した住居址も菖蒲谷のすぐ東に当たる三世庵地点であり、菖蒲谷の谷水田を經營する人々が、その谷と並行に住居を配し生活していたのではないかと考えられてきた。

参考文献 岡本健児 「日本の古代遺跡39 高知」 保育社 1989.4

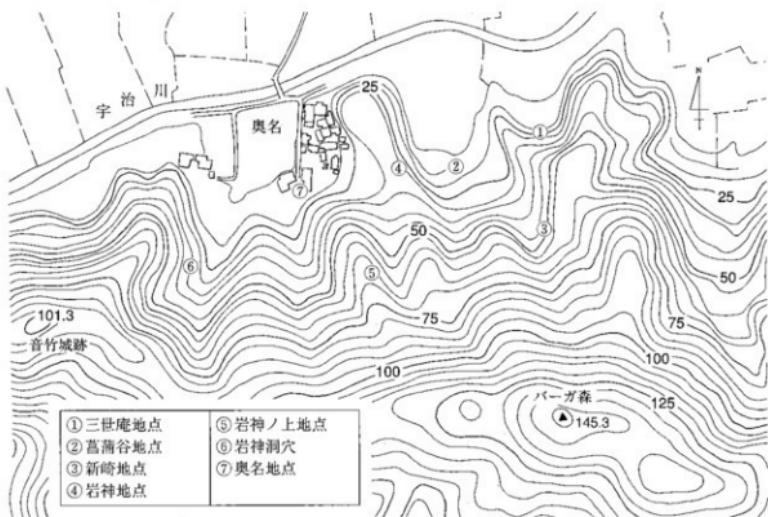


Fig.2 遺跡周辺図

S=1/5000

2.地理的環境

本遺跡の所在する伊野町は、北緯33度32分41秒、東経133度25分49秒、高知県の中央部に位置し、総面積は100.58km²を測る。北は吾川郡吾北村、南は同春野町及び土佐市、西は高岡郡越知町、同日高村、東は土佐郡鏡村及び高知市に接する。伊野町は山勝ちの地形で、地質的にはほとんど秩父帯-古生層に属する。特に、北に高く南に低く明瞭に二区となっており、面積では北部の山地が圧倒的に広大であるが、その利用度は南部低地が著しい。北部山地は四国山地の前山となっており、吾北村、鏡村との境には後線が連なって、中道地区泉の北には標高932mの葦山が聳え、またこれに次ぐ標高919mの鷹羽ヶ森が東北部三瀬地区に聳える。南部低地に目を向けると、仁淀川西部は玄番城跡付近に標高200m足らずの小丘が日高村との境をなす。東部は鉢巻山を南限にし、八田の地溝を挟んで北にバーガ森その北には伊野の地溝がある。鉢巻山、バーガ森等はいずれも高度は100~200mで高峻ではなく、高知市朝倉に台地状の地形が続く。

北部山地からいくつかの溪流が注ぐ仁淀川は、愛媛県石鎚山にその源流を持ち、四国山地内を南下し多くの支流を合わせて土佐湾に流れ込む。流路延長は123.4km、総流域面積は1,585km²で四国第3位の河川である。仁淀川の名称は、その昔朝廷の賛殿に鮎を毎年貢租したので賛殿川になりいつしか仁淀川になったという説や、川の様相が淀川に似ていることから似淀川と呼ばれ仁淀川になったという説があるが、定説はない。かつては水運を利用して、上流域の傾斜地で生産された畑作物や、豊かな林産資源が下流に運ばれた。流域は多雨地帯で、かつ急流であり県内でもかなり早いうちから、電源開発が進められていた。また、豊富な水と冬の温和清明な気候は、伊野町を代表する産業である製紙業を育てた。

現在の伊野町は、人口25,731人（平成10年8月末現在）で、県内各市町村では、過疎化、人口減が



Fig.3 伊野町現況図

呼ばれる中、高知市郊外のベッドタウンとして着実に人口が増加しつつある。産業は南部平坦地では施設園芸と果樹栽培が中心となっており、中部ではショウガを特産としている。工業では近世以来土佐和紙の生産で知られ、印刷業、製紙業が盛んである。

交通は県都高知市とJR土讃線、土佐電気鉄道、国道33号線によって直結し、JR土讃線は須崎・中村方面へ、国道33号線は松山方面へ延びる。また、四国横断自動車道南国・伊野間が平成10年3月20日に開通したことにより、県西部地域から四国各地や本州への起点として、その重要性が増している。しかし、人口増や四国横断自動車道へのアクセス等に伴い、主要幹線道路である国道33号線を始め、県道39号土佐伊野線、県道38号高知土佐線等は交通量の増加が著しく、交通渋滞が頻繁に生じる状況となっている。基幹農道伊野南線の完成により、農産物の輸送の合理化を図ると共に周辺の交通渋滞緩和が期待されている。

参考文献 横川末吉 「伊野町史 自然編」伊野町 1973.11
山本大 他 「角川日本地名大辞典39」角川書店 1991.9



バーガ森 遠景



仁淀川

3.歴史的環境

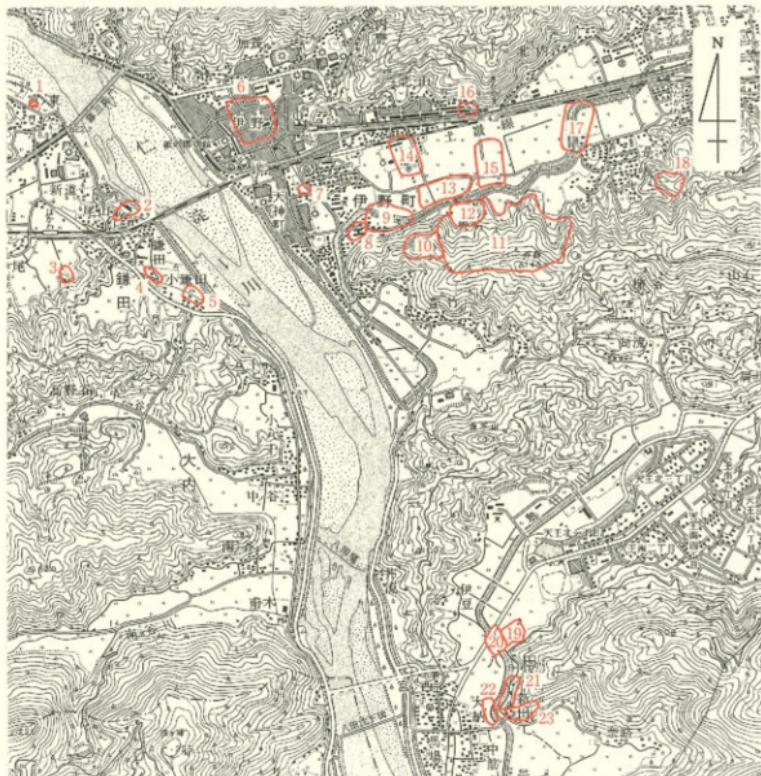
伊野町を中心に周辺の歴史的環境を述べる。伊野町内における人の痕跡として最も古いものは、宇治川左岸の奥名で発見された船元ⅢA式土器が挙げられ、縄文時代中期まで遡ることになる。また、宇治川右岸の平野部にある大デキ遺跡では排水溝工事の際に、晩期のものと考えられる磨製石斧が水田中に発見されている。

弥生時代に移ると、まず前期の遺跡として春野町山根遺跡が挙げられる。山根遺跡は仁淀川流域における拠点的集落遺跡として著名である。中期では町内の 大デキで発見された壺形土器、サジキで発見された石包丁及び、八田岩滝ノ鼻の中縄形銅剣が中期中葉に属するものと考えられる。また、中期中葉から末にかけて本遺跡を始めいくつかの高地性集落が出現する。その一つが朝倉城山遺跡であり、本遺跡とは尾根伝いに約3kmの距離にある。時期的には中期中葉と考えられ、本遺跡に先行して高地性集落が形成されていたものと考えられる。他にも土佐市の用石甫木山遺跡等が中期末の高地性集落として挙げられる。後期では伊野町商店街の真中に寺門遺跡があり、壺形土器、壺形土器、高杯形土器が出土している。本遺跡の山麓に位置する天神溝田遺跡では弥生終末期の土器及び、銅剣、銅戈が出土している。また、春野町の西分増井遺跡には後期後半から古墳時代初頭にかけての拠点的集落が成立した。

古墳時代前期から中期にかけては、八田岩滝ノ鼻から鉄斧及び土師器が出土している。また、大デキ遺跡、サジキ遺跡、日下川下流右岸の波川遺跡等では5~6世紀代の遺物が出土している。春野町西分に所在する馬場末遺跡出土の土師器は、各器形の土器が揃っていることから標準遺跡となっている。後期になると散発的に古墳が造営される。土佐市波介川流域に、ここ谷古墳群(2基)、塚地サルバミ古墳、春野町新川川流域に弘岡上古墳、伊野町奥田川流域に八田古墳、宇治川の最上流、通称琴平山の南麓斜面には3基からなる枝川古墳群がある。1号墳では玄門付近で人骨が発見されており、玄室中央部で須恵器・玉類・勾玉・銀環等が出土している。

律令制下の伊野町は、大半が吾川郡に属したものとみられる。当初、吾川郡は仁淀川の東西に広がりを見せ8郷から成っていたが、『続日本後紀』によると承和8年(841年)の条に吾川8郷のうち4郷を分けて高岡郡を置いたと記されている。仁淀川右岸を高岡郡として独立させたものと考えられる。『和名抄』に見える郷のうち、波川地区が高岡郡吾川郷、枝川・池ノ内地区が土佐郡朝倉郷に、その他は吾川郡大野郷に属したとみられる。また、八田地区を吾川郡桑原郷に入れたという説もある。東大寺文書によると、大野郷は土佐郡鴨部郷とともに天平勝宝4年(752年)には東大寺の封戸となっている。鴨部郷は天暦4年(950年)には外されているが、大野郷は古代を通じて東大寺へ封物を送り続けている。

古代末には土佐でも多くの荘園が成立する。吾川郡は吾川庄として鎌倉期に成立する。『吾妻鏡』によると、吾川郡は京都六条若宮八幡の別当に別当職付属の所領として与えられている。室町時代に入ると、香美郡田村城に細川一族の領益が入部、幕府の支配が成立し守護領国制が展開する。吾川庄には吉良氏の名がすでに南北朝期に出現しており、仁淀川を挟んで左岸には吉良氏、右岸は大平氏、波川氏の勢力が台頭していく。



No.	遺跡名	種別	時代	No.	遺跡名	種別	時代
1	宮ノ東遺跡	散布地	弥生	13	塔の向遺跡	散布地	弥生
2	鍛田城跡	城館跡	中世	14	高海老遺跡	ク	ク
3	月田上神社遺跡	祭祀遺跡	近世	15	大アキ遺跡	ク	縄文～古墳
4	ハギ原遺跡	散布地	中世	16	北山前遺跡	ク	古墳
5	門田遺跡	ク	ク	17	ヤジキ遺跡	ク	弥生～中世
6	寺門遺跡	ク	弥生	18	坂口遺跡	ク	弥生
7	次郎丸遺跡	ク	ク	19	岩瀬ノ鼻遺跡A	ク	ク
8	天神道跡	ク	中世	20	岩瀬ノ鼻遺跡B	ク	古墳
9	天祐溝田遺跡	ク	弥生	21	觀音ノ鼻遺跡	ク	ク
10	音竹城跡	城郭跡	中世	22	新田遺跡	ク	ク
11	バーガ森北斜面遺跡	集落跡	弥生・中世	23	觀音ノ平遺跡	ク	ク
12	奥名遺跡	散布地	縄文				

Fig.4 周辺の遺跡分布図

さて、永正4年（1507年）守護代細川氏が退去することにより、土佐も戦国の時代に突入する。大平氏は衰退し、名族吉良氏も南下してきた本山氏に滅ぼされることとなる。吾川郡を含む土佐の中原は朝倉城を占拠した本山氏の支配するところとなる。しかし、その本山氏も、永禄6年（1563年）には長宗我部氏の猛攻に絶えきれず本山城へと退く。生産豊かな吾南平野を手放すことによりその後の本山氏は衰退の一途を辿り、土佐の中原は本山氏に代わり長宗我部氏の支配下に組み込まれる。吾南平野については、元親の弟親貞が民心収攬のため吉良氏の名跡を継ぎ新支配者となる。当時の山城として、本遺跡の周辺にも音竹城跡を始め東に朝倉城跡、仁淀川を挟んで西に玄蕃城跡等が所在する。玄蕃城跡や春野町の芳原城跡、吉良城跡等は発掘調査も行われており、文献には表れない当時の様相も徐々にではあるが明らかになりつつある。

近世に至ると長宗我部氏に代って山内氏が入国する。二代藩主忠義の寛永8年（1631年）、執政の任に就いた野中兼山は積極的な経営手腕を見せる。伊野・高岡周辺に八田堰、鎌田堰、弘岡井筋、高岡井筋等の井堰と用水路を建設し、新田開発に力を注ぎ農業生産力の増大を図った。今日、吾南平野が香長平野と並び土佐の穀倉地帯と呼ばれるのも、これらの灌漑用水路の恩恵である。またこの時期、楮の積極的な栽培奨励が行われ、山間部でも大いに生産されるようになった。これにより「土佐和紙」が藩を支える産業として、藩権力による厳重な管理の下に発展を遂げる。民衆の激しい抵抗にも会い、一部自由販売も認めざるを得なかつたが、御蔵紙は御蔵米と同様に藩の重要な財源となり、幕末から明治の全盛期を迎えるのである。

参考文献

- | | | | |
|-----------|---------------------------|-------|---------|
| 横川末吉・岡本健児 | 「伊野町史」 | 伊野町 | 1973.11 |
| タ | 「土佐市史」 | 土佐市 | 1978.5 |
| 岡本健児 | 「日本の古代遺跡39 高知」 | 保育社 | 1989.4 |
| 山本 大 他 | 「角川日本地名大辞典39」 | 角川書店 | 1991.9 |
| 平尾道雄 | 「土佐藩」 | 吉川弘文館 | 1965.3 |
| 広谷喜十郎 他 | 「土佐和紙の系譜・いの町紙の博物館10周年記念誌」 | 伊野町 | 1995.3 |

第Ⅲ章 調査の概要

1.調査の方法

本年度調査区は、奥名橋南の山部分（I区）と、その山を東に降りた谷部分（II区）である。I区は標高45～65m、最大斜度が45°以上の急斜面で、重機の導入が不可能であった。また、II区には進入路がなく、これも重機が導入できず、結局、表土除去からのすべての作業を人力によって行わねばならなかった。調査対象面積は2,200m²、I区の最上段とII区の谷部分の比高差は約30mで、面積が狭い割りには比高差の大きい調査区であった。

I区は試掘調査によって最上段の平坦部、2段目の平坦部の表土下約40cmで遺構・遺物を確認していた。本発掘は最上段より始め、各平坦部ごとに表土を除去し包含層を掘削、構造検出の後、遺構の調査を行い、必要に応じて、写真撮影及び図面を作成した。急斜面部は調査が行えず、何段かある平坦部の調査を行い、緩斜面部についてはトレンチ調査を併用した。

II区も試掘調査によって弥生時代中期末と考えられる遺物・遺構、及び古代の遺物を確認しており、I区と同様の手順で調査を行った。I区、II区ともに表土の除去に際しては、必ず抜根が伴い、すべて人力作業であるため包含層に至るまでにかなりの時間を要した。

なお、調査終了時には航空写真撮影と航空測量を実施した。また、調査に先立って、3級基準点を調査区内外の5ヶ所に設置した。基準点設置及び航空写真撮影、航空測量はアジア航測株式会社に依頼した。I区SK-1より出土した炭化物については、パリノ・サーヴェイ株式会社に放射性炭素年代測定を依頼した。

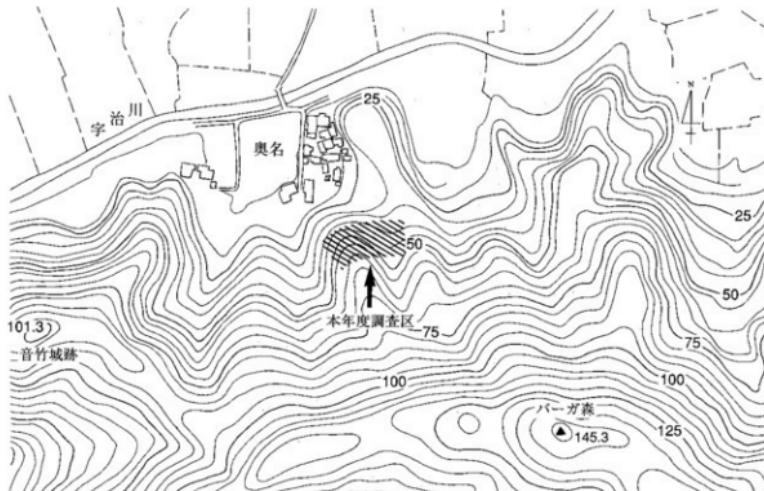


Fig.5 調査区位置図

S=1/5000

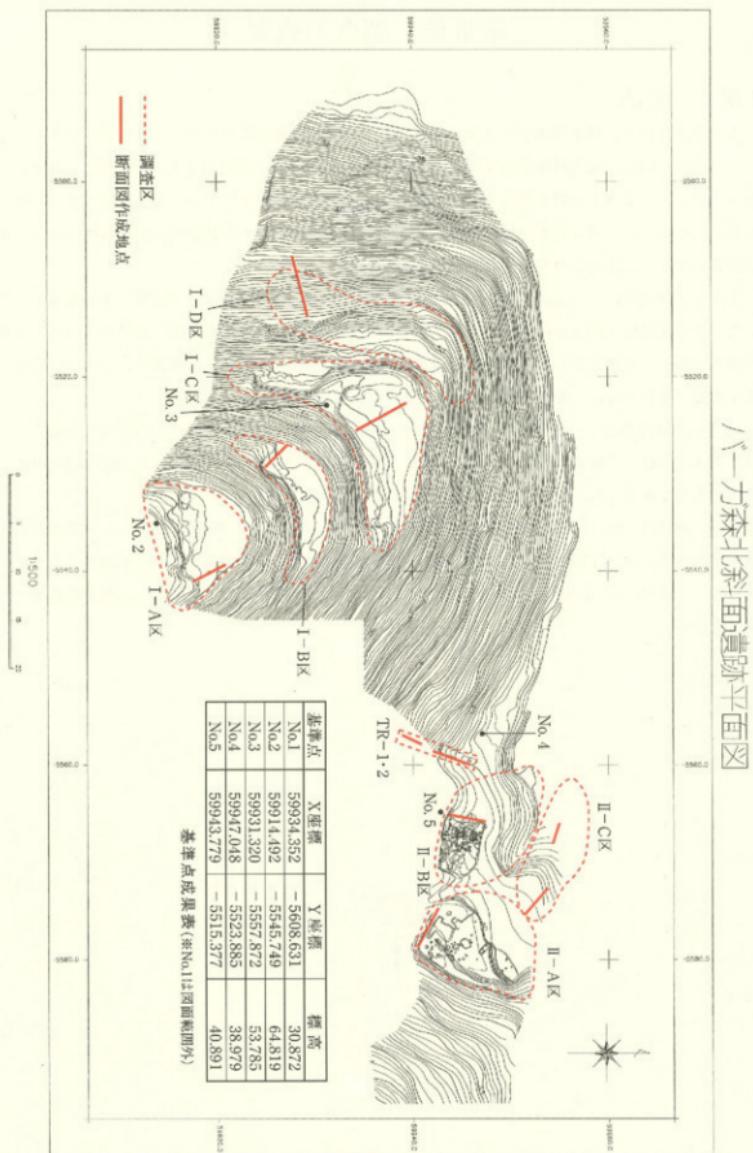


Fig.6 調査区設定図

2. I 区の調査

I-A区はI区最上段の平坦部であり、標高63.0~65.1m、面積は約100m²を測る。I区で唯一の明確な遺構であるSK-1は第III層上面で検出した。I-B区は2段目に当たる平坦部であり、標高57.6~59.2m、面積約80m²を測る。I区の全遺物の約73%が出土している。遺物量が多く、当初遺構に伴うものかと考えたが残念ながら遺構は検出できなかった。I-C区は3段目の平坦部であり、標高51.6~54.2m、面積約200m²を測り、本調査区では最も広い平坦部である。C区より下に狭い平坦部が3ヶ所あり、これらをまとめてI-D区とした。標高は47.4~50.8m、面積は約140m²であった。

(1) I-A区の調査

基本層序

第Ⅰ層 表土層

第Ⅱ層 黄褐色礫質砂層

第Ⅲ層 明黄褐色砂質礫層

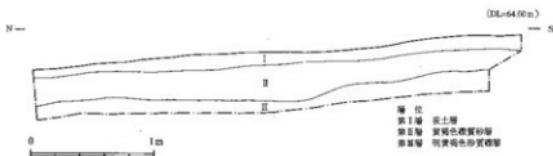


Fig.7 I-A区 東壁セクション図

堆積層は3層から成り、西は堆積が厚く、東は薄い。西に向かってごく緩い傾斜を見せる。第Ⅰ層は表土層で暗褐色砂質シルト層であり、腐葉土と考えられI区全体に堆積している。東側で5~15cm、西側で10~20cmの厚さを測る。第Ⅱ層は黄褐色礫質砂層であり、弥生時代中期末と考えられる遺物包含層で、I-A区の西部1/4には堆積が見られなかった。厚さは20~30cmを測り、1~2cmの小礫及び炭化物微細片を多く含む。出土遺物は、弥生土器細片と石包丁であった。第Ⅲ層は明黄褐色砂質礫層で、I-A区全体に堆積している5cm大の大きな礫を含む層で、厚さ15~20cmを測る。第Ⅲ層の下は岩盤である。

出土遺物

第Ⅱ層中より、弥生土器及び石製品が出土した。図示できるものは石製品2点のみである。

石製品

1、2共に磨製の石包丁である。1は全長10.3cmを測る完形のものである。湾曲部と直線部を持つ両刃石包丁で、全体を丁寧な研磨によって仕上げる。中央部よりやや上に双孔を穿つ。石材は紅麻片岩と考えられる。2は1/2ほど残存する。直線部を刃部とする片刃の石包丁で、刃部付近は研磨によ

って丁寧に仕上げられる。不明瞭ではあるが、中央より上部に開孔した痕跡が残る。石材は安山岩であると考えられる。

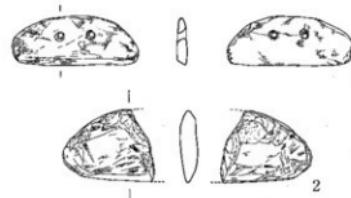


Fig.8 I-A区 出土遺物実測図

造構

SK-1

A区西の第Ⅲ層上面で検出する。表土下約30cm、北西へ緩く傾斜する斜面に掘られ、底面はほぼ3段になる。長径156.2cm、短径101.8cm、深さ33.4cmを測り、長軸方向はN-69°-Wである。埋土は炭状の黒色土の單一層で、炭化した微粒子の中に10cmを越える炭化材が数片、10~3cm大のものが十数片混入していた。底から出土した縛には明らかに火を受けた痕跡が残っていた。土器微細片も若干出土したが、時期の判明するような遺物はなかった。

(2) I-B区の調査

基本層序

第Ⅰ層 表土層

第Ⅱ層 褐色粘土質シルト層

第Ⅲ層 黄褐色砂質砂層

第Ⅳ層 黄褐色砂質砂層

堆積層は4層から成り、北に向いては緩傾斜であるが西南へは強く傾斜する。第Ⅰ層は表土層で暗褐色砂質シルト層である。第Ⅱ層は褐色粘土質シルト層であり、部分的に表土がブロック状に混入する。調査区の西1/3には堆積が見られない。若干の弥生土器細片が出土している。第Ⅲ

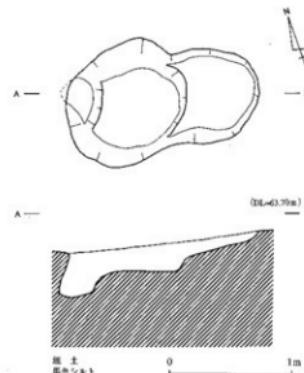


Fig.9 SK-1

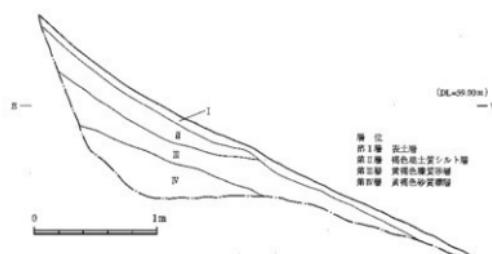


Fig.10 I-B区 南壁セクション図

層は黄褐色礫質砂層であり、礫の大きさは主に1~2cmであるが、5cmを越える大型の礫も若干含む。弥生時代中期末の遺物包含層であり、I-A区の第Ⅱ層に相当すると考えられる。出土遺物は弥生土器及び石製品である。第Ⅳ層は黄褐色砂質礫層であり、第Ⅲ層との分層はかなり困難であったが、含まれる礫がほとんど5cmを越える大きなもので、礫の間にわずかに砂質土が含まれる。A区の第Ⅲ層に相当するものと考えられる。

出土遺物

第Ⅱ層中より若干の弥生土器が出土している。復元図示できたものは1点である。

弥生土器

3は口径21.0cmを測る壺で、口縁部の1/2ほど残存する。外上方に大きく開き、粘土帯を折り曲げて肥厚させた後、端部に1条の沈線を施す。口縁下部には圧痕文を施し、その下には三日月状の施文が残る。内外面にはナデ調整が確認できる。

第Ⅲ層中からは弥生土器約700点、石製品4点が出土した。

弥生土器

4~8は壺で、4、5は共に最大径を口縁部に有する。4は口径23.0cm、胴径22.0cmを測り、口縁部から胴部にかけて1/6ほど残存する。口縁部は大きく外反し、端部はやや厚めに作られ内傾する面をなす。口縁下部に刻目及び一条の微隆起帶を挟む櫛描き文を施す。肩部には竹管で刺突した円形浮文を配し、四条の微隆起帶で区画した中に櫛描き文を、その下に刻目を施す。内面にはナデ調整及び指頭圧痕が残るが摩滅が激しく不明瞭である。胎土は粗く、2~3mmの砂粒を多く含む。5は口径14.8cm、胴径13.8cm、口縁部から胴部にかけて2/3ほど残存する。頸部は直立し、大きく外反する口縁部は粘土帯を折り曲げて肥厚させている。口縁下部及び胴部中位には刻目を、肩部には圧痕文を、上胴部には櫛描き文を施す。内面はナデ調整を施す。6、7は口縁部から胴部にかけての破片である。共に、直行する頸部から、口縁部は緩やかに外反し端部を丸く仕上げる。1~2条の沈線を頸部から上胴部の間に施し、肩部には刺突を施した円形浮文を配す。内外面ともナデ調整が施される。胎土には1~3mmの砂粒を多く含む。6は口径13.0cm、胴径14.1cmで、最大径を胴部に有する。7は口径14.0cmを測る。8は口径16.8cmを測り、口縁部から胴部にかけて1/6ほど残存する。頸部でやや屈曲し、口縁部は外傾する。口縁端部を丸く仕上げる。内面にはナデ調整を施し、指頭圧痕が残る。外面は摩滅しており調整は不明である。8も最大径を胴部に有する。9~14は壺の口縁部の破片で、9、10は貼付口縁である。9は口径17.6cmを測り、口縁部の1/3ほどが残存する。大きく開く口縁部で、粘土帯を貼付して肥厚させており、端部は内傾する面をなす。口縁下部にはヘラ状工具による刻目が施される。摩滅が激しく調整は不明瞭であるが、内面はナデ調整で仕上げている。胎土は粗く、2~3mmほどの大きな砂粒を多く含んでいる。10は口径20.3cmを測り、口縁部の1/4ほどが残存する。大きく開く口縁部であり、粘土帯を貼付し肥厚させ指頭によって粘土帯を押さえ、端部に刻目を施す。焼成は不良で、摩滅が激しく調整は不明である。胎土は粗く、1~2mmの砂粒を多く含む。11は緩やかに

外反する口縁部で、口径24.4cmを測る。端部は内傾する面をなし、刻目を施す。口縁下部には一条の微隆起帯を挟んで上下に櫛描き文を施す。焼成は不良で、摩滅が激しく調整は不明である。胎土には2mm大の砂粒を多く含む。12は外反する口縁部で、口径22.1cmを測り、端部に刻目を施す。摩滅が激しく調整は不明である。胎土は粗く、1~3mmの砂粒を多く含む。13は外反する口縁部の破片であり、口縁部を折り込み肥厚させている。端部は内傾する面をなし、口縁下部には刻目及びハケ目が確認できる。内面はナデ調整を施すが、外面は不明である。胎土には2mm大の砂粒を含む。14は外反する口縁部の一部であり、端部は面をなしている。口縁下部にはハケ目が確認できる。内面はナデ調整を施しているが、外面は不明である。15は口径8.0cmを測る長頸壺である。細く伸びる頸部から、口縁部は緩やかに外傾する。端部は上を向く面をなす。口縁部外面はヘラ状工具による刻目を施し、その下に浮文を貼付する。浮文を境として、頸部には五条の微隆起帯で区画した中に櫛描き文を施す。頸部下位の縦方向の施文も櫛描きによるものである。内面の調整は不明。胎土には細砂粒を含む。焼成は良好である。16、17は壺の胴部破片である。16は五条の微隆起帯で区画された中に櫛描き文を施す。摩滅しており、調整は不明である。17は上胴部に浮文及び櫛描き文を施す。内面は摩滅しており調整は不明である。

18、19は甕の口縁部の破片であり、四線文を施すものである。18は口径15.3cmを測り、肩部に張り

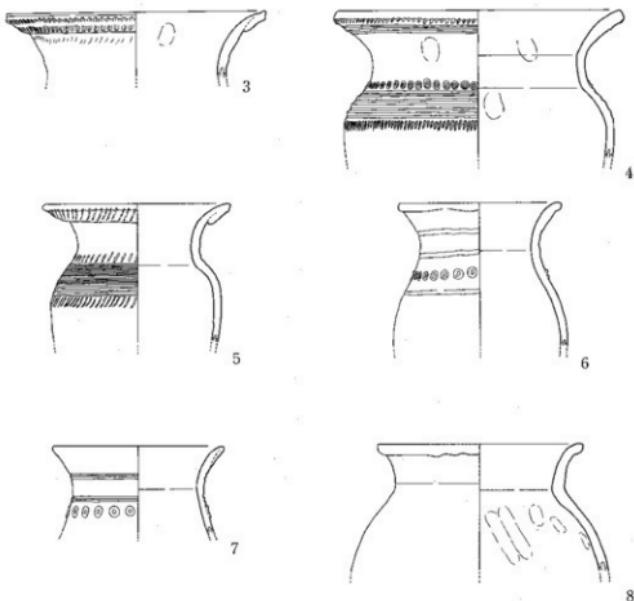


Fig.11 I-B区 出土遺物実測図1

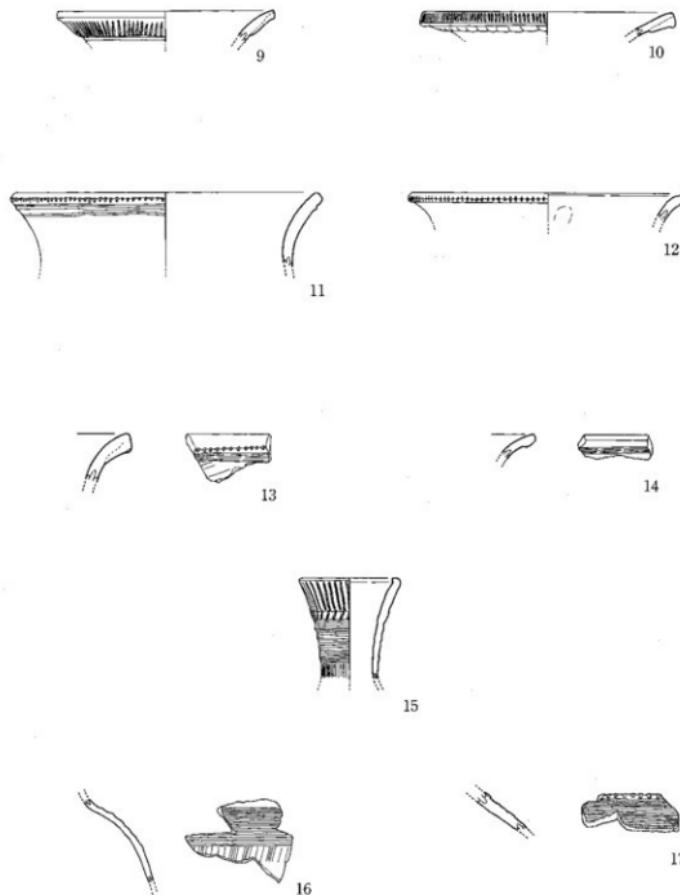


Fig.12 I-B区 出土遺物実測図2

がなく、口縁部は「く」の字状に屈曲する。端部を上下に拡張し、3条の凹線文を施す。口縁部から頸部にかけては、内外面ともにナデ調整を施す。胴部外面にはヘラ磨きを施す。19はやや外反する口縁部であり、口径14.4cmを測る。端部を上下に拡張し、3条の凹線文を施す。内外面にはナデ調整を施す。共に焼成は良好である。20は壺の底部で、上げ底気味の底部から直線的に立ち上がる。底径は5.0cmを測る。

21、22は高杯の脚部である。21は脚部の1/2ほどが残存し、底径は10.2cmを測る。脚部から裾部へ「八」の字状に開き裾端部を拡張し、1条の凹線文を施す。脚部外面には鋭い金属工具により、3条の沈線を3組配し、その間に鋸歯文を施す。裾部には、5個を1単位とする竹管文を配す。内面にはヘラ削り調整を施す。胎土には細砂粒を若干含み、焼成は良好でしまりがある。22は脚部から杯底部の破片である。細い脚部から杯部は大きく開く。杯部内外面ともにヘラ磨きを施す。

石製品

23は叩石の可能性が考えられる。片面の中央部に、ごく弱い敲打痕が残る。石材は花崗岩である。

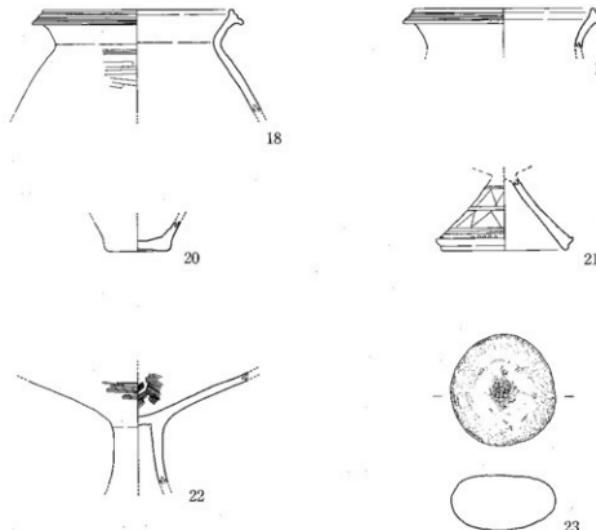


Fig.13 I-B区 出土遺物実測図3

(3) I-C区の調査

基本層序

- 第Ⅰ層 表土層
- 第Ⅱ層 暗褐色粘土質シルト層
- 第Ⅲ層 黄褐色粘土質シルト層
- 第Ⅳ層 にぶい黄褐色砂質疊層

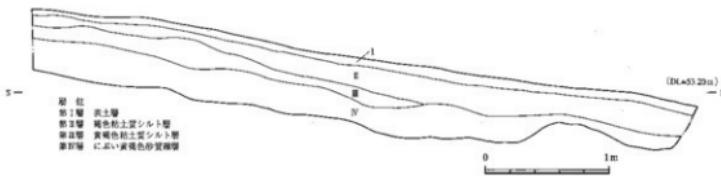


Fig.14 I-C区 西壁セクション図

堆積層は4層から成り、北西に向かってごく緩やかに傾斜する。第Ⅰ層は表土層で暗褐色砂質シルト層である。第Ⅱ層は褐色粘土質シルト層であり、部分的に表土がブロック状に混入する。弥生土器数点が出土しているが復元図示できるものはない。第Ⅲ層は黄褐色粘土質シルト層であり、小疊を含む。平坦部の中央から西には堆積が見られない。弥生時代中期末の遺物を包含するものの、A区、B区の包含層とは、土質的に若干の相違が見られる。出土遺物は弥生土器、石製品である。第Ⅳ層はにぶい黄褐色砂質疊層であり、5cmを越える大型の疊を含む。B区の第Ⅳ層に相当するものと考えられる。

出土遺物

第Ⅲ層中より、弥生土器約80点と石製品が出土している。

弥生土器

24~29は壺の口縁部の破片である。どれも胎土が粗く、焼成も不良で、27以外は調整も不明である。24、25はそれぞれ口縁部の1/4ほど残存する。口縁部は強く外反し、端部はやや厚く作られる。26は口縁部の1/6ほど残存する。外反する口縁部であり、端部は内傾する面をなす。口縁下端に刻目を有す。27も外反する口縁部で、端部は外傾する面をなす。口縁下端には刻目及び、一条の微隆起帯を挟むハケ目が確認できる。内面にはナデ調整を施す。28は口縁部の1/5ほど残存する。大きくラッパ状に開く口縁である。29は外傾する口縁部の一部であり、端部は内傾する面をなす。口縁下部にはヘラ状工具による刻目及び、刺突された円形浮文を施し、その下に不明瞭ではあるが櫛書き文が残る。それぞれの口径は、24が17.4cm、25が20.6cm、26が17.2cm、27が16.6cm、28が18.0cmである。31は長頸壺で、口径7.6cmを測る。細く伸びる頸部から、口縁部は緩やかに外反する。口縁端部は丸く仕上げられ、外面には米粒大の浮文を配す。頸部全体に櫛書き文を施す。内面は摩滅が激しく調

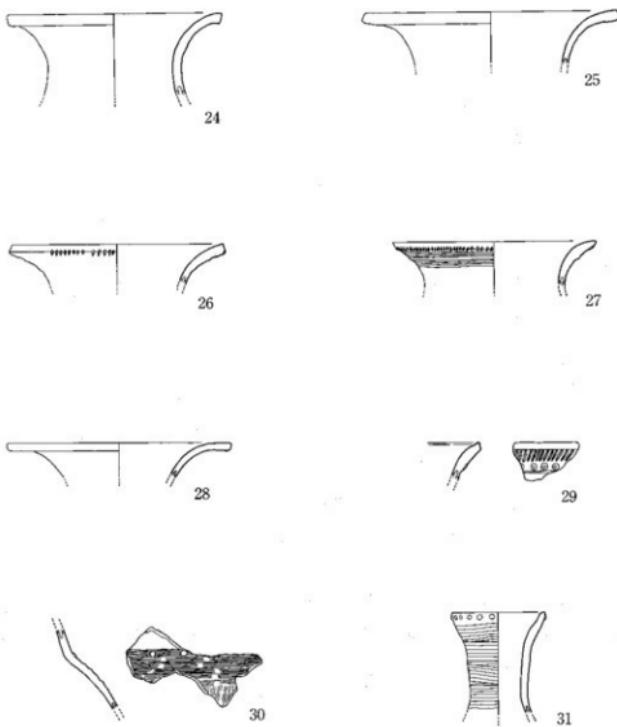


Fig.15 I-D区 出土遺物実測図

整は不明である。胎土は粗く1~3mmの砂粒を多く含む。30は壺の胴部の破片である。上胴部には、櫛描き文及び、円形浮文を配し、その下に五条の微隆起帯で区画された中に櫛描き文を施す。摩滅しており調整は不明である。

(4) I-D区の調査

基本層序

第Ⅰ層 表土層

第Ⅱ層 明褐色粘土質シルト層

第Ⅲ層 褐色粘土質シルト層

堆積層は3層から成っており、北西にかなり急な傾斜をみせる。第Ⅰ層は表土層であり、暗褐色砂

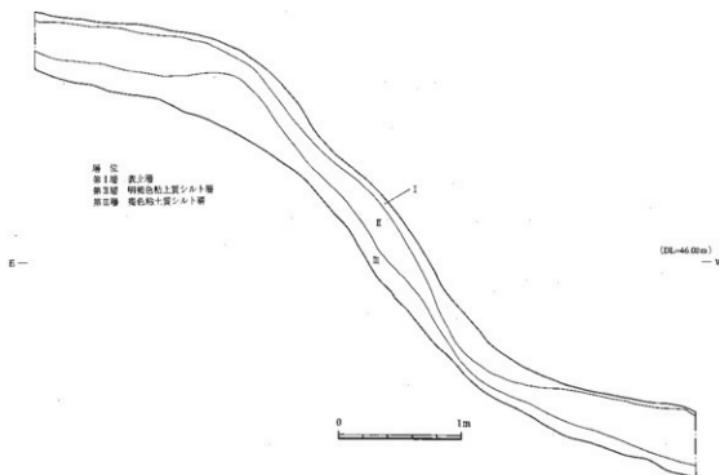


Fig.16 I-D区 南壁セクション図

質シルト層である。少量の弥生土器が出土する。第Ⅱ層は明褐色粘土質シルト層であり、若干の礫を含む。第Ⅲ層は褐色粘土質シルト層であり、礫を多く含む。D区には明確な包含層はない。

出土遺物

第Ⅰ層中より出土した、弥生土器が1点だけ図示できる。

弥生土器

32は壺で、口縁部から胴部にかけて1/6ほど残存する。口縁部は大きく外反し、上胴部には浮文、また上胴部から肩部にかけては、櫛書き文が残るが、摩滅が激しく不明瞭である。調整も不明である。胎土は粗く、1~3mmの砂粒を多く含む。最大径を口縁部に有す。器壁は薄い。

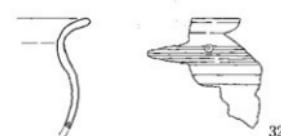


Fig.17 I-D区 出土遺物実測図

3. II区の調査

II区に関しては沼澤を境に、東と西で若干様相が違うので、これをA区とB区に分けた。またII区北西部の一段下がった場所は、旧地形が畠であり、これも様相を異にするのでC区とした。II区は三方が山、一方が竹林であり、当初より廃土の処理が困難であると予想された。そこで試掘調査の結果を踏まえ、遺構検出の可能性が最も薄いC区を最初に済ませた上で、廃土置き場にする予定で進めた。

II-A区は標高39.6m~41.6m、面積は約100m²を測る。西に向かって緩い傾斜を見せ、北西部は後世の削平を受けている。第VI層上面で竪穴住居址(ST-1)を検出し、その床面からST-2を検出した。

II-B区は、I区の北東部斜面下に当たる。標高は39.0~40.0m、面積は約100m²を測る。北東に向かって緩やかに傾斜する。また、本遺跡で初めての古代の遺物包含層が確認された。調査区外ではあるが、南東に向かって若干上がった地点に150m²ほどの平坦部があり、この時期に関係する遺構が残る可能性がある。

II-C区は標高は36.5~40.1m、面積約100m²であった。

(1) II-A区の調査

基本層序

第I層 表土層

第II層 オリーブ褐色砂質シルト層

第III層 褐色シルト層

第IV層 褐色粘土質シルト層

第V層 オリーブ褐色粘土質シルト層

第VI層 明褐色砂質疊層

堆積層は6層から成り、西に向かって緩やかに傾斜しつつ徐々に薄くなる。第I層は表土層で、黒褐色砂質シルト層であり腐葉土と考えられる。II区の一部を除いてほぼ全面に堆積する。第II層はオリーブ褐色砂質シルト層で、2~3cmの疊を含む。第III層は褐色シルト層であり、オリーブ褐色の

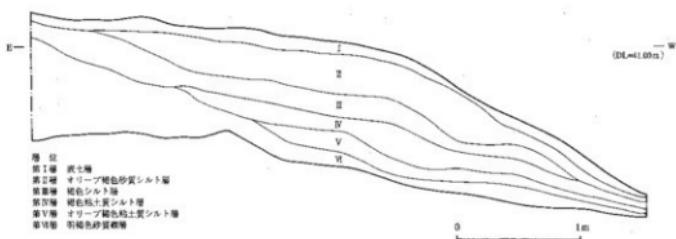


Fig.18 II-A区 南壁セクション図

ブロックが混入する。1~2cmの礫が混入し、やや粘性がある。若干の弥生土器及び、近世陶磁器が出土している。第Ⅳ層は褐色粘土質シルト層で、オリーブ褐色のブロックが混入する。第Ⅲ層との分層が困難であったが、第Ⅲ層に比較して粘性がかなり強い。第Ⅴ層は、オリーブ褐色粘土質シルト層であり、粘性が強い。弥生時代中期末の遺物包含層で、出土遺物は弥生土器、石製品である。第Ⅵ層は明黄褐色砂質礫層で、10cmを越える礫を多く含み、マンガン粒が混入する。第Ⅶ層上面でST-1を検出した。

出土遺物

第Ⅲ層中より、弥生土器約70点、近世陶磁器約20点が出土している。図示できるものは、弥生土器1点のみであった。

弥生土器

33は壺で、平底の底部でややくびれを持ち立ち上がる。底径は5.4cmを測る。焼成は不良である。胎土には1mm程度の砂粒を含む。

第Ⅴ層中からは、弥生土器約300点と石製品が出土している。

弥生土器

34は壺の上げ底気味の底部であり、底径5.2cmを測る。指頭による押圧で高台状に仕上げ、外面にはハケ調整を施す。胎土には5mm大の砂粒を含む。

35、36、37は口縁部に凹線文を有する壺である。35は口径15.3cmを測り、口縁部から下胴部まで2/3ほど残存する。口縁部は「く」の字状に強く屈曲し、端部を上下に拡張し、2条の擬凹線文を施す。上胴部が張り、胸径は21.3cmと最大径を胴部に有す。口縁部にはナデ調整が施され、上胴部には内外面ともに丁寧なハケ調整が認められる。外面には、綾杉状の文様が配され、胴部の下2/3は丁寧なヘラ磨きで仕上げられる。また、胴部内面の下2/3にはヘラ削り調整が施される。外面には部分的に煤の付着が残存する。他の凹線文土器に比べて、器壁もかなり薄く作られ焼成も良好である。調整も丁寧で在地の土器とは考えにくい。四国東部ないしは、瀬戸内からの搬入品かと考えられる。36は口径14.0cm、胸径16.7cmを測る。口縁部から胴部にかけて1/5ほど残存する。口縁部は「く」の字状に強く屈曲し、端部は上下に拡張され、2条の凹線文を施す。肩部には列点文を配す。外面は口縁下部にナデ調整、胴部にハケ調整を施し、内面には指頭圧痕が残る。ヘラ削りの後、ハケ調整を施す。胎土には細砂粒を含む。焼成は良好である。最大径を上胴部に有す。37は口縁部の破片で、口径17.8cmを測る。直立する頸部から、口縁部は外反する。端部を若干拡張し、4条の擬凹線文を施す。口縁部外面にはナデ調整を施す。また、煤の付着が確認できる。胴部内面にはヘラ削り調整を施し、焼成は良好である。38も壺で、口径22.0cmを測り、口縁部の1/3ほど残存する。ほぼ直立する口縁部で、粘土帯を貼付して肥厚させており、口縁下部に刻目を施す。摩滅が激しく調整は不明である。焼成は不良で、胎土は粗く1~2mmの砂粒を多く含む。39は壺の底部で、底径8.2cmを測る。平底の底部からほぼまっすぐに立ち上がる。焼成は良好である。外面には煤の付着が確認できる。

石製品

40, 41は叩石である。40は両面の中央部に明瞭な敲打痕が残る。石材は花崗岩である。41は片面に弱い敲打痕が残る。石材は花崗岩である。42は川原石で投弾の可能性が考えられる。径6.5cmを測る円盤形で、手の中に入れやすい大きさである。石材は石英斑岩である。

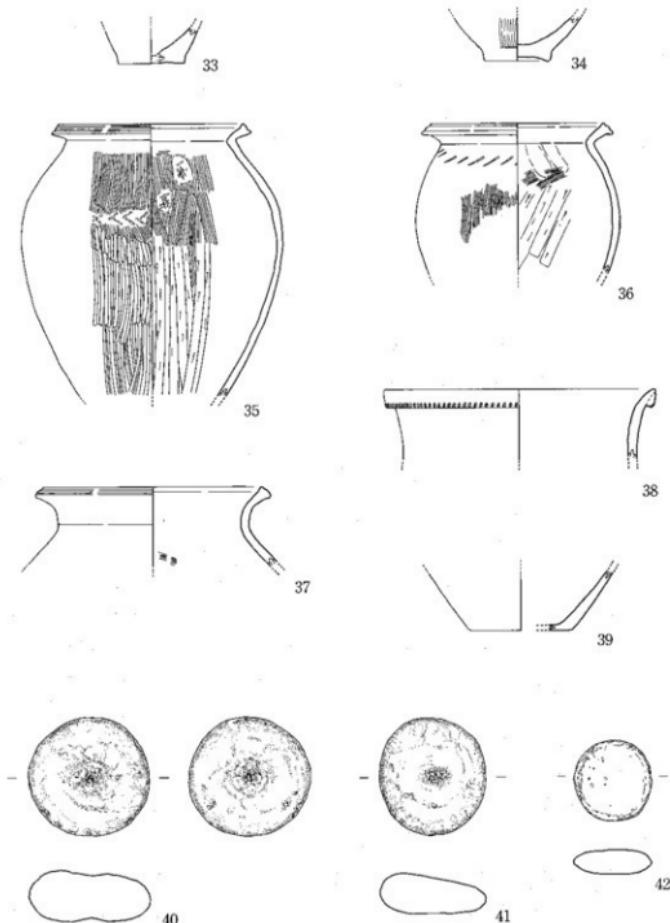


Fig.19 II-A区 出土遺物実測図

遺構と遺物

ST-1

II区の沼沢の東、緩やかに西へ傾斜する斜面部に掘り込まれた住居址である。II-A区の第V層上面、表土下約40cmで検出した。検出時の標高は40.50~40.85mで、旧地形は竹林であり、遺構面にまで竹の根が張っており、検出及び遺構掘削には困難を要した。北西側1/3及び、北東側の一部が後世に削平されている。平面形は梢円形と考えられ、長径は8.00m以上、短径は6.50m程度と推定される。壁高は南東側の最も高いところで60.1cm、西で18.3cmあり、床面の標高は40.25m前後であった。埋土は4層に分層でき、埋土2及び埋土3から弥生土器、石製品等が出土した。床面には一面に、炭化物や土器微細片の広がりを確認することができ、ビット5個を検出した。P-1は住居址の中央より南に位置し、長径128.0cm、短径108.5cm、深さ20.0cmを測る梢円形を呈し、長軸方向はN-29°-Eである。P-1からは炭化物及び弥生土器細片が4点出土している。P-2は長径84.0cm、短径60.5cm、深さ25.7cmを測る不整形のビットで、弥生土器細片が数点と若干の炭化物微細片が出土している。P-3~P-5は円形のビットで規模は、P-3が20.4cm×18.2cm、深さ14.5cm、P-4が17.6cm×13.2cm、深さ16.6cm、P-5が20.2cm×18.3cm、深さ24.0cmである。3個の円形ビットのうちP-5から数点の弥生土器細片が出土したのみである。P-1からは火を受けた痕跡が残る石なども出土しており、炉として使用された可能性が高い。P-3~P-5については、柱穴と考えるには径がやや小さい。出土遺物は約1700点であった。

ST-1出土遺物

埋土2

弥生土器

43、44は長頸壺である。43は外傾する口縁部の破片で、やや厚く作られ、端部を丸く仕上げる。口縁下部に斜格子状の文様を施す。調整等は摩滅が激しいため不明である。胎土には1~3mmほどの砂粒を多く含んでいる。焼成は不良である。44は緩やかに外反する口縁部で口径は10.0cmを測る。焼成は不良で、摩滅がかなり激しく調整も不明である。45、46は壺の底部である。45は底径6.6cmを測り、平底の底部から内湾気味に立ち上がる。外面は摩滅しているが、内面にはハケ調整を施している。胎土には3mm大の砂粒を多く含む。46は底径8.0cmを測り、平底の底部からややくびれを持って立ち上がる。外面には不明瞭ではあるがハケ調整を施している。

47~49は壺である。47は口縁部の破片で、口径16.2cmを測る。口縁部は強く「く」の字状に屈曲する。端部を上下に拡張し、2条の凹線文を施す。焼成は不良で、摩滅が著しく調整は不明である。胎土には1mm程度の砂粒を若干含む。48、49は底部の破片である。48は平底の底部からほぼ直線的に立ち上がる。胎土には細砂粒を含む。49は底径4.7cmを測り、平底の底部でややくびれを持ち立ち上がる。胎土は粗く1~3mmの砂粒を多く含む。

石製品

50、51は叩石の可能性が考えられる。共に片面の中央部にごく弱い敲打痕が残る。石材は共に花崗岩である。52は砥石であり、3面を使用している。石材は砂岩である。

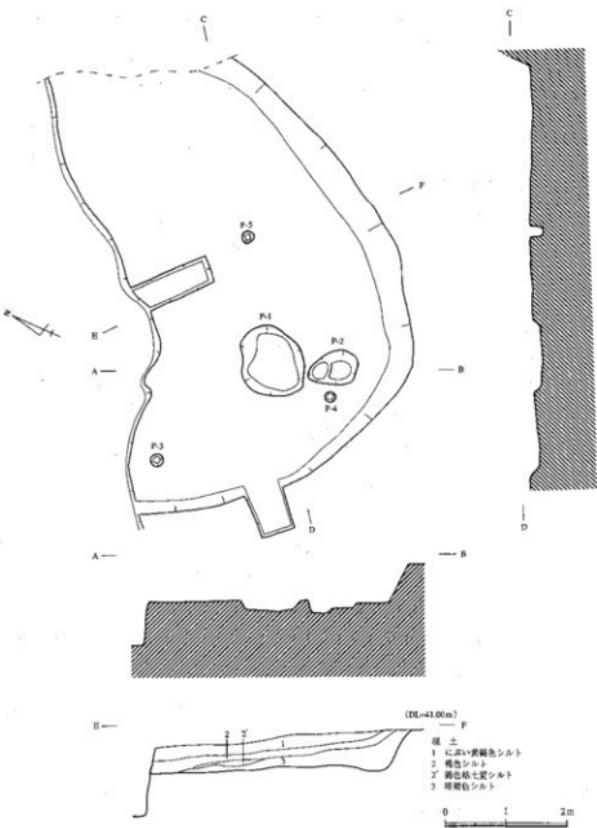


Fig.20 ST-1

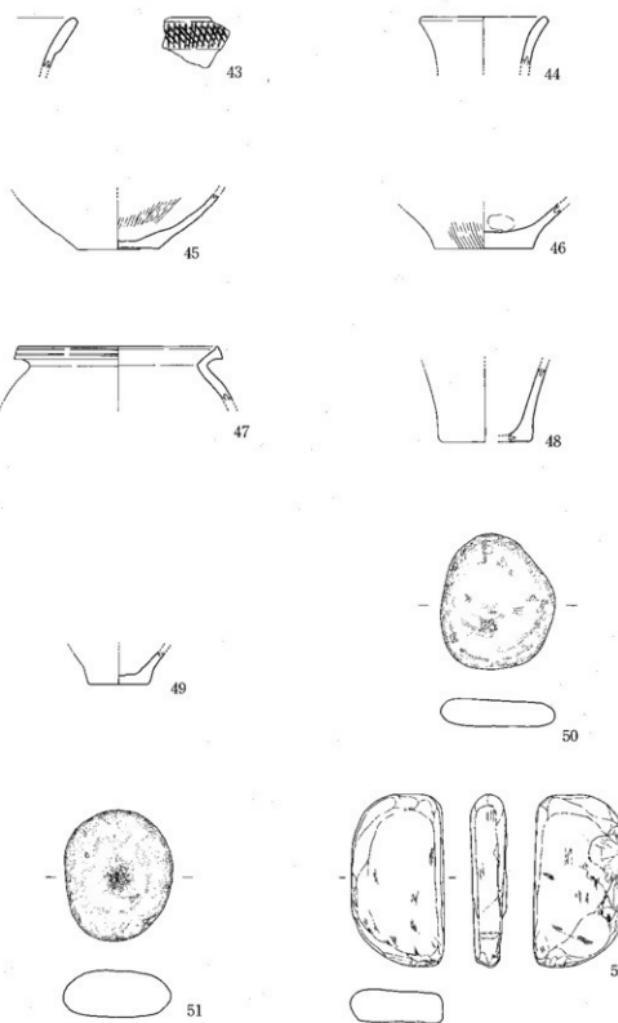


Fig.21 ST-1 出土遺物実測図1

埋土3

弥生土器

53~59は壺である。53は口縁部の破片で口径16.8cmを測る。直立する頸部から、口縁部は大きく外反し、端部の粘土帯を折り曲げて肥厚させている。中央をつまみ構円状にした浮文を肩部に配する。摩滅が激しく調整は不明である。胎土は粗く細砂粒を含む。54, 55も口縁部の破片で、共に大きく外反する。54の口縁部は、端部が凹面をなし下端に刻目を施す。直下に一条の微隆起帯と、それを挟むように櫛描き文を施す。胎土には1~2mmほどの砂粒を含んでいる。55は口縁端部の粘土帯を折り曲げて肥厚させている。調整等は摩滅が激しいため不明である。胎土には2~3mmほどの大きな砂粒を含んでいる。焼成は不良である。56はST-1の床面近くで出土した長頸壺で、口径7.3cmを測る。口縁部は若干厚く作られている。細く延びる頸部から、口縁部は緩やかに外反する。端部は上に向く凹面をなす。口縁部外面の綫方向の施文は櫛描きによるもので、その下には2個を1単位とした米粒大の浮文を数カ所配す。浮文を境として頸部には櫛描き直線文を施す。摩滅が激しく調整は不明である。胎土は粗く1~3mmの砂粒を多く含む。57は底部の破片で底径7.3cmを測る。平底の底部より内渦気味に立ち上がる。胎土には3mm大の砂粒を多く含む。58, 59は胴部の破片であり、どれも焼成が不良で摩滅が著しい。胎土も粗く、1~2mmの砂粒を多く含む。58は上胴部に刻目を施し、その上下に櫛描き文を施す。59は床面近くで出土しており、胴部中位に刻目を施す。摩滅が激しく、上胴部の櫛描き文はその痕跡がようやく確認できる程度である。

60~66は壺である。60~63は口縁部から胴部にかけて残存しており、すべて最大径を上胴部に有する。63を除いて凹線文を施す。60は1/5ほど残存し、口径は16.5cmを測る。口縁部は強く「く」の字状に屈曲する。端部を上に拡張し2条の凹線文を施す。内外面ともに摩滅が著しく調整は不明である。内面には指頭圧痕が残る。また胴部外面には煤の付着が残存する。61も1/5ほど残存し、口径は15.0cmを測る。直立する頸部から、口縁部は大きく外反し、端部を若干拡張する。口縁端部の摩滅が著しく不明瞭ではあるが、2条の擬凹線文が確認できる。外面は口縁下部から、頸部にかけてナデ調整、胴部は綫方向のハケ調整を施す。内面には指頭圧痕が残り、横方向にヘラ削り調整を施す。胎土には細砂粒を含む。焼成は不良であり内外面に煤の付着が残る。62は1/6ほど残存し、口径14.8cmを測る。「く」の字状に強く屈曲する口縁部で、端部は上下に拡張されている。全体的に摩滅が激しく、端部に3条の擬凹線文が確認できるのみで調整等は不明である。胎土はやや粗く、1mm大の砂粒を含む。焼成は不良である。63は1/5ほど残存し、口径14.4cmを測る。端部をやや上に拡張する。胎土は粗く、1~3mmの砂粒を多く含む。焼成は不良で摩滅が著しく、調整も不明である。64, 65は口縁部の破片で、64は強く「く」の字状に屈曲する。端部を上に拡張しており、摩滅が激しく確認が困難であるが、3条の擬凹線文を施している。口縁部内外面にはナデ調整を施す。胴部外面にはハケ調整を施す。焼成は不良である。外面に煤の付着が確認できる。65も「く」の字状に屈曲する口縁部である。端部を若干拡張しており、摩滅が激しく確認が困難であるが、5条の擬凹線文を施している。口縁部から頸部にかけてはナデ調整が確認できる。焼成は不良で、頸部に煤の付着が確認できる。66は底部であり、底径5.2cmを測る。やや上げ底気味の底部で、くびれを有して立ち上がる。胎土には細砂粒を含む。焼成は不良で摩滅が激しい。

石製品

67はほぼ長方形を呈すると考えられる石包丁で、1/3ほどが残存する。片刃であり、刃部付近は丁寧に研磨される。石材は砂岩であると考えられる。

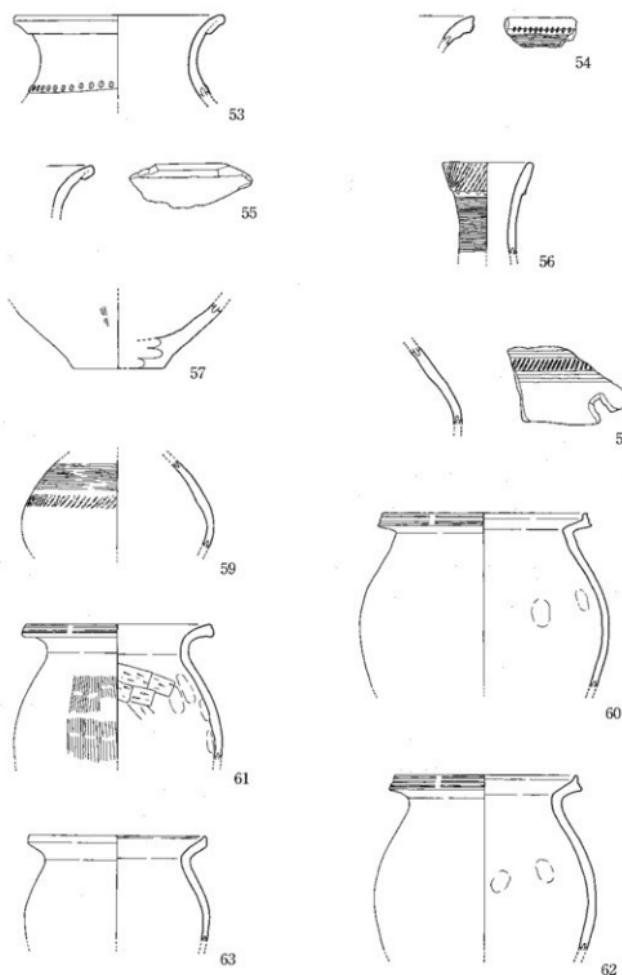


Fig.22 ST-1 出土遺物実測図2

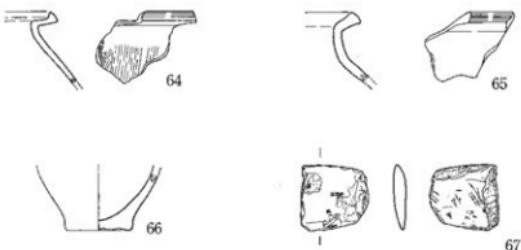


Fig.23 ST-1 出土遺物実測図3

ST-2

ST-1の床面精査中にプランを確認した。出土遺物から時期差を導き出すことはできないが、ST-1床面から掘り込みで、ST-1の使用が終了した後、ST-2に移ったのではないかと考えられる。残念ながらそのほとんどが削平を受けており、1/6ほどが確認できただけである。ST-1と同様の規模で、楕円形のプランを呈するものと推定される。壁高は66.4cmを測り、壁に沿って壁溝が長さ3.76mに渡り確認された。検出時の標高は40.10~40.20mである。埋土は2層に分層でき、埋土2より約400点の弥生土器、及び石製品が出土した。床面にはピット4個を確認した。P-1は44.0cm×24.5cm、深さ42.0cmで--部壁から掘り込まれている不整形のピットである。P-2、3は円形のピットで、P-2は20.4cm×21.2cm、深さ25.6cmを測り、P-3は23.0cm×24.4cm、深さ33.2cmを測る。P-4は38.4cm×21.1cm、深さ9.6cmを測る不整形のピットである。P-3からは弥生土器細片が1点出土した。床面の標高は39.57m前後である。

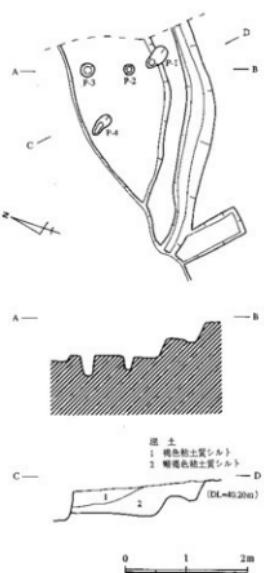


Fig.24 ST-2

ST-2出土遺物

弥生土器

68~70は壺である。68、69は口縁部の破片で、共に大きく開く口縁部である。焼成は不良で摩滅が著しい。胎土も粗く、1~3mmの砂粒を多く含む。68は口径23.6cmを測り、端部は内傾する面をなす。口縁下部に圧痕文を施す。69は口縁部に粘土帯を貼付している。端部は内傾する面をなし、口縁下部に中央をつまみ捺円状にした浮文を配する。70は底部で、底径6.6cmを測る。平底の底部からややくびれを持って立ち上がる。胎土には3mm大の砂粒を多く含む。全体的に焼成が不良で摩滅が激しい。

石製品

71、72は石錐である。71は全長6.7cm、重量は230gを測り、石材は花崗閃緑岩である。72は全長6.6cm、重量は183.9gを測り、石材は花崗岩である。共にST-1との境の周辺で出土している。石錐の出土は本遺跡では初めてである。

(2) II-B区の調査

基本層序

第Ⅰ層 表土層

第Ⅱ層 褐色粘土層

第Ⅲ層 暗褐色シルト層

第Ⅳ層 褐色シルト層

第Ⅴ層 暗褐色シルト層（大礫多く含む）

第Ⅵ層 にぶい黄褐色疊層

堆積層は6層から成り、第Ⅰ層は表土層で、黒褐色砂質シルト層である。第Ⅱ層は褐色粘土層である。弥生時代から古代の遺物が若干出土している。第Ⅲ層は暗褐色シルト層で、小礫及び若干の炭化

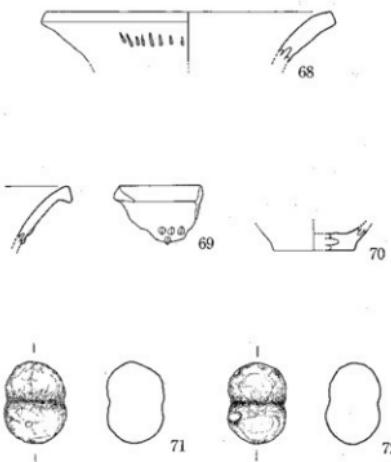


Fig.25 ST-2 出土遺物実測図

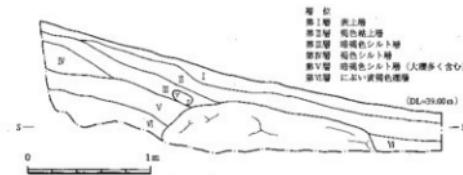


Fig.26 II-B区 西壁セクション図

物を含み、粘性が強い。古代の遺物包含層と考えられる。第Ⅳ層は褐色シルト層であり、小碟を含む。第V層は暗褐色シルト層であり、炭化物微細片及び5cm大の碟をかなり多く含む。弥生時代中期末の遺物包含層である。出土遺物は弥生土器、石製品である。第VI層はにぶい黄褐色疊層である。第III層から第V層については、B区中央より北には堆積が見られない。

出土遺物

第II層中より、弥生土器、土師器、石製品が出土しているが、遺物の点数も少なく流れ込みであると考えられる。図示できるものは2点であった。

弥生土器

73は壺の底部で、底径4.1cmを測る。やや上げ底気味の底部であり、高台状に仕上げる。

石製品

74は叩石である。両面の中央部と側面に、敲打痕が残る。石材は花崗岩である。摩滅が激しい。

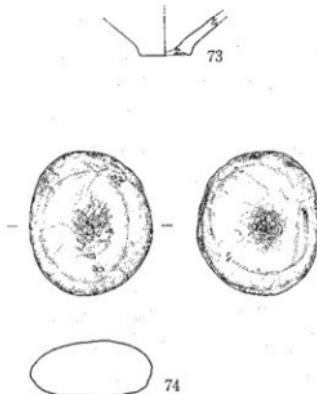


Fig.27 II-B区 出土遺物実測図1

第III層中からは弥生土器約200点、土師器約800点と須恵器、石製品が出土している。

弥生土器

75、76は壺である。75は強く外反する口縁部の一部である。口縁下部に刻目及び一条の微隆起帯を配し、その下に櫛描き文を施す。摩滅しており調整は不明である。76は長頸壺の口縁部で、口径9.8cmを測る。やや外傾する口縁部で、端部は上を向く面をなす。口縁下部には刻目及び、円形浮文を配し、その下には三条の微隆起帯が確認できる。摩滅が激しく、調整は不明である。胎土は粗く、1mm大の砂粒を多く含む。

77は壺の口縁部の破片で、「く」の字状に屈曲する。端部を上に拡張しており、2条の凹線文を施している。内外面にハケ調整が確認できる。胎土には細砂粒を含み、焼成は不良で摩滅が激しい。

土師器

78は壺で、「く」の字状に屈曲する口縁部の破片である。端部は内傾する面をなす。外面には縱方向のハケ調整を施す。胴部外面には煤の付着が確認できる。胎土には細砂粒を含む。

79はほぼ完形の杯であり、口径11.7cm、器高3.8cm、底径4.1cmを測る。回転糸切り痕の残る底部から、内湾しつつ口縁部に至る。体部にはロクロ目が残り回転ナデ調整が施される。土師器で回転糸切りの確認できるものはこれ1点である。80は平高台を有する杯の底部で、底径9.0cmを測る。摩滅が

激しく調整は不明である。81は無高台の杯の底部で、底径7.2cmを測る。摩滅が激しく調整は不明である。

須恵器

82は壺であり、底径13.4cmを測る。胴部内面及び底部外面には回転ナデ調整、胴部外面には回転ヘラ削り調整が施されている。底部内面にはかなりの凹凸があり、指頭圧によるものと考えられる。胎土には細砂粒を若干含み焼成は良好である。

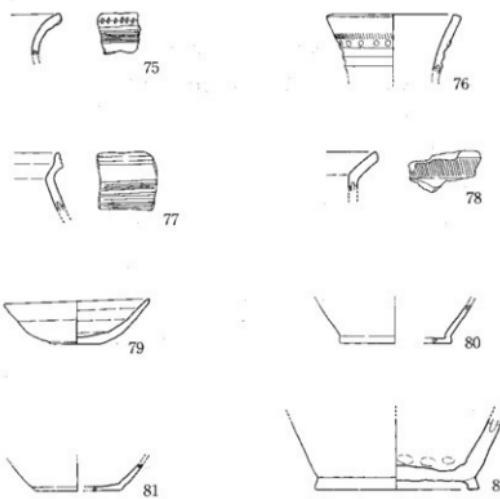


Fig.28 II-B区 出土遺物実測図2

第V層中からは、弥生土器約140点と石製品が出土している。

弥生土器

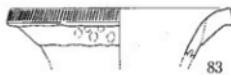
83~85は壺の口縁部である。83はラッパ状に開き、口径17.7cmを測る。幅広の粘土帯を貼付し、肥厚させている。端部は内傾する面を成し、刻目を施す。口縁下部には指頭圧痕が残る。摩滅が激しく調整は不明であり、胎土には2~3mmほどの大きな砂粒を多く含んでいる。84は口縁部の1/6ほどが残存する。口径15.2cmを測り、「八」の字状に開く。端部は内傾する円面をなす。口縁下部にヘラ状工具による刻目を施す。また、一条の微隆起帶を挟み上下に櫛書き文を施し、その上に米粒大の円形浮文を配す。調整は摩滅が激しく不明である。胎土には1~3mmの砂粒を多く含む。85は口縁部の1/4ほど残存し、口径21.2cmを測る。直立する頸部から、口縁部は強く外反し、端部をやや厚く作る。内面はヘラ削りの後ナデ調整が施されており、指頭圧痕も確認できる。外面は摩滅しており調整は不明である。焼成は不良である。

86は甕の口縁部の破片で、強く「く」の字状に屈曲する。端部を若干拡張しており、摩滅が激しく確認が困難ではあるが2条の凹線文を施している。口縁部内外面にはナデ調整を、頸部外面にはハケ調整を施す。胎土には細砂粒を含む。

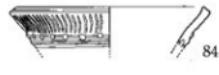
87は高杯で脚部の1/5ほどが残存し、底径6.6cmを測る小型のものである。脚部から裾部へ「八」の字状に開き裾端部を拡張し、不明瞭ではあるが2条の凹線文が確認できる。脚部外面には鋭い金属工具により、沈線及び鋸齒文を施し、裾部には刺突文を施す。内面にはヘラ削り調整を施す。胎土には砂粒はほとんど含まれず、焼成は良好でしまりがある。

石製品

88は磨製の石包丁であり、1/2ほど残存する。湾曲部と直線部を持つ両刃石包丁で、全体を丁寧な研磨によって仕上げる。中央部よりやや上に孔を穿つ。石材はサヌカイトである。89は叩石であり、片面に敲打痕が残る。石材は花崗岩である。



83



84



85



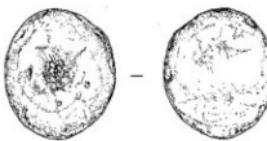
86



87



88



89

Fig.29 II-B区 出土遺物実測図3

(3) II-C区の調査

基本層序 (II-C区上段)

第Ⅰ層 表土層

第Ⅱ層 明褐色砂質礫層

第Ⅲ層 明褐色粘土層

第Ⅳ層 褐色粘土層

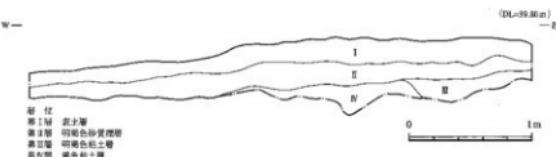


Fig.30 II-C区 上段北壁セクション図

II-C区は上段、下段に分けて調査を行った。上段の第Ⅰ層は表土層であり、灰色シルト層である。C区上段は腐葉土の堆積がない。第Ⅰ層より、弥生土器及び、土器師の細片が数点出土するが復元図示できるものは無かった。第Ⅱ層は明褐色砂質礫層で部分的に砂質土のブロックが混入する。第Ⅲ層は明褐色粘土層であり、第Ⅳ層は褐色粘土層である。第Ⅱ層から若干の弥生土器細片が出土したのみで復元図示できるものは無かった。

基本層序 (II-C区下段)

第Ⅰ層 表土層

第Ⅱ層 赤灰色砂質シルト層

II-C区下段は第Ⅰ層が表土層で黒褐色砂質シルト層である。第Ⅱ層は赤灰色砂質シルト層であり、旧耕作土と考えられる。第Ⅰ層、第Ⅱ層共に遺物は出土しなかった。

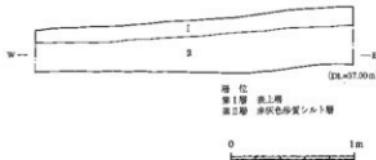


Fig.31 II-C区 下段北壁セクション図

(4)TR-1及び、TR-2の調査

I区山裾に当たる斜面部は傾斜が急だったので、II-B区に近い場所でトレンチ調査を行った。II-B区西にトレンチを開削し北よりTR-1、TR-2とした。標高はTR-1が40.0~40.6m、TR-2が41.5~42.8mであった。

TR-1 東壁セクション

第Ⅰ層 表土層

第Ⅱ層 黄褐色粘土質シルト層

第Ⅲ層 褐色粘土質シルト層

第Ⅳ層 暗褐色礫層

第Ⅰ層は表土層で、黒褐色砂質シルト層である。第Ⅱ層は黄褐色粘土質シルト層で、小礫及び炭化物細片を含む。第Ⅲ層は褐色粘土質シルト層であり、5cm大の礫を多く含む。弥生土器細片が数点出土したが、復元図示できるものはなかった。第Ⅳ層は暗褐色礫層である。礫の大きさは5~10cmを測る。



Fig.32 TR-1 東壁セクション図

TR-2 東壁セクション

第Ⅰ層 表土層

第Ⅱ層 黄褐色粘土質シルト層

第Ⅲ層 褐色粘土質シルト層

第Ⅰ層~第Ⅲ層はすべてTR-1と同様である。出土遺物はなかった。

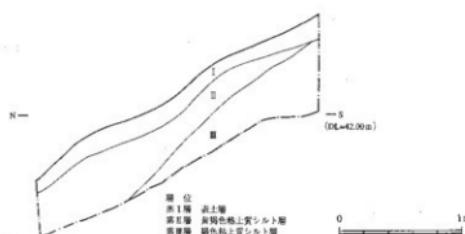


Fig.33 TR-2 東壁セクション図

第Ⅳ章　まとめ

1. 遺物

今次発掘調査における出土遺物は約4800点を数えた。一部、古代のものが出土しているが、そのほとんどが弥生土器で中期末の時期に属するものであり、器種としては壺、甕、高杯であった。壺は広口壺と長頸壺に分かれ、長頸壺は6点のみであり、残りはほとんど広口壺であった。壺については口縁を折り曲げたり、粘土帯を貼付して肥厚させた貼付口縁土器が目立つ。甕は「く」の字に屈曲する頸部から口縁部を拡張し、口縁端部に凹線文を施すものが多い。高杯は3点のみの出土であった。

本県中央部における弥生時代中期末の遺跡では、貼付口縁土器と凹線文土器が共伴する。貼付口縁土器は、中期中葉以降末にかけて、西南四国を中心に分布する在地性の高い土器である。⁽¹⁾ かたや凹線文土器は、畿内第Ⅲ様式に始まり第Ⅳ様式に最も盛行する。⁽²⁾ 畿内から中・四国、また中部地方の一部にかけて広域に分布しており、本県では主に東部から中央部にかけて出土している。高知平野周辺部の遺跡で出土する貼付口縁土器と凹線文土器の数を比較すると、東部に位置する南国市田村遺跡群、土佐山田町龍河洞遺跡では、それぞれ4:6、2:8の割合であり、凹線文土器が優勢であると言える。今次調査の出土遺物をカウントすると、口縁部と確認できるものが157点、そのうち貼付口縁土器49点、凹線文土器36点であり、単純に数の比較をするとほぼ6:4となった。高知平野でも西端部に位置する本遺跡では、その地理的条件から、西南四国の地域色がやや強く残ると考えられる。

しかし一方で、今回の調査では1点のみであるが、No.35のような撮入品が出土しているということは、中央との交流という点からも注目に値する。

また今回の調査においては、本遺跡で初めて古代の遺物包含層を確認することができた。出土した古代の遺物は、土師器を中心に約800点を数える。古代包含層はⅡ-B区にのみ堆積しており、明らかにB区の南東方向に当たる斜面上から続いている。時期的には10世紀後半から11世紀初頭と考えられ、斜面上の平坦地には当時の遺構が残る可能性が考えられる。

2. 遺構

以前の学術調査においては、菖蒲谷の東で壁面をもたない半平地半堅穴住居址を検出している。⁽³⁾ 今次調査で検出した住居址は形態的にはやや異なるものの、その出土遺物から時期的には弥生時代中期末と考えられ、以前の調査で検出した住居址とほぼ同時期である。そして、今回住居址を検出できたⅡ区は、菖蒲谷の南西に当たり、以前の調査成果として「菖蒲谷の谷水田を經營しつつ、谷のと並行にいくつかの住居をかまえている」と論じられていることを、検証することができたと考える。

I区で検出できた遺構はA区のSK-1のみであった。埋土は厚さ33cmを測る炭状の黒色土の單一層であり、その中に、大小の炭化材及び火を受けた痕跡の残る石などが含まれていた。高地性集落遺跡の縁辺部に焼土坑を有する例は畿内でも多く報告されており、狼煙台として機能していたという

説も有力視されている。⁽⁴⁾ 今次調査のSK-1の場合は、検出面の上層が非常に不明瞭であり、周辺では貼付口縁土器や石包丁が出土しているものの、遺構の時期の特定が困難を極めた。そこで、出土した炭化材について放射性炭素年代測定を行い、その結果、遺構の時期は、鎌倉末~室町初頭と判明した。なお、測定の詳しい報告は付編2に記す。

SK-1の狼煙跡という可能性が消えたとしても、I区からは今次調査において出土した弥生土器の約20%が出土しており、これは住居址2棟を検出したII区と大差のない時期のものと考えられる。住居址が機能していた際、I区全体をその付帯施設として使用していた可能性は高い。I区で出土する遺物のほとんどが、I-A, B, C区という比較的標高の高い地点に集中していること、そしてこれらの地点からは眺望が良く、東は枝川、西は仁淀川まで、現在の伊野町中心街をほとんど一望にできることなども考え合わせると、I区の山を見張り台的な性格を持つ施設として使用していた可能性が考えられる。

3.本遺跡の性格

高地性集落の概念に関しては、次のように大別することができる。『狭義の高地性集落』とは、弥生時代中期末から後期に、見張り、防塞等に有効な地理的条件を備える高地に営まれた集落であり、武器的遺物や防備施設等が存在する。これに対して『広義の高地性集落』とは、単に比高差のみに着目して、他の低地性の集落よりも高い場所に所在するとしたものである。本遺跡に関しては、防備施設と考えられる遺構は確認されていないものの、武器的遺物は、以前の学術調査において、数点の石鎚、投弾の可能性が考えられる石製品等が出土している。⁽⁵⁾ 地理的にも前項で触れたように見張りや防塞に有効な高地であることから、狭義の高地性集落の条件をほぼ備えている遺跡であると言える。

また、バーガ森に小規模ではあるが集落が形成されたもう一つの理由は、谷水田を経営するに足る湧水があったからである。豊富な水に支えられた生産力という裏付けなしに、集落の形成は考えにくい。高地性集落が成立する時期の農業は谷水田の経営に重点が置かれたようで、同時期の遺跡である野市町本村遺跡等でも報告されている。⁽⁶⁾ 菖蒲谷周辺には現在でも數カ所の湧水地点があり、弥生時代においても基本的な地理条件については、さほど変化がないと考えられ、谷水田の経営に十分な水が確保されていたものと考えられる。

このようにバーガ森北斜面遺跡は、第IV様式の時期に西日本で形成された高地性集落の一つとして挙げることができ、かつ集落を形成するに至る諸条件を備えていたと言えよう。

最後に、今次調査は基幹農道部分だけの緊急発掘調査であり、バーガ森北斜面遺跡の全容を明らかにしたとは言い難い。本遺跡の性格を決定付ける上で重要な箇所は、調査区外にも多くある。例えば、I-A区の上段に当たる平坦部、II区南東部斜面上の平坦部、また菖蒲谷の南東部などである。今後、それらの箇所に新たな調査が入ることによって、本遺跡の性格がより明確になっていくことを期待する。

註

- (1) 岡本健児 神西式土文化の再検討 高知女子大紀要 人文・社会科学編 第20巻 1971.12
- (2) 正岡睦夫 四線紋・擬凹線紋 「弥生文化の研究」 第3巻 1997.4
- (3) (1)と同じ
- (4) 岡本健児 「日本の古代遺跡39 高知」 保育社 1989.4
- (5) (4)と同じ
- (6) 森岡秀人 高地性集落 「弥生文化の研究」 第7巻 1997.6
- (7) (6)と同じ
- (8) (4)と同じ
- (9) (1)と同じ
- (10) 坂本憲昭 「野市町本村遺跡調査報告書」 野市町教育委員会 1993.3

付編 1

バーガ森北斜面遺跡出土石製品に関する岩石学的見解

福井清子

1.はじめに

遺跡の発掘調査に際して出土する石製品には、川原石を利用した製品の占める割合が高い。これまで、これらの川原石の岩石名は、肉眼鑑定により砂岩とされることが多かったが、明確な根拠には乏しかった。

本遺跡においても、叩石、投弾、石包丁、石錘等多くの石製品が出土しており、それら遺物の一部について、薄片を製作し顕微鏡による鑑定を行うことによって、岩石名を特定することにした。あわせて、岩石の供給地についても考察する。

2.謝辞

薄片製作、鑑定においては、旭地研の岩田修一氏にご協力いただいた。また、石製品の供給地の特定では、神戸大学の波田重熙教授にご指導いただいた。記して謝意を表したい。

3.地質概要

バーガ森北斜面遺跡より上流の仁淀川流域には、南より北へ黒瀬川構造帯、秩父累帯北帯、三波川帯が東西方向の帶状分布をしている。

黒瀬川構造帯は、秩父累帯北帯と中帯との間に分布する大規模な断層帯で、シルルー・デボン系が大小のレンズ状岩体として分布している。秩父累帯北帯には、主に三疊紀～ジュラ紀の年代の砂岩と泥岩の互層が分布し、チャート、石灰岩、苦灰岩、緑色岩類などの大岩体を伴っている。秩父累帯とその北側の三波川帯との境界は断層で、上八川－池川構造線と呼ばれている。上八川－池川構造線に沿っては、幅数m～数十mの規模で新生代中新世の石英斑岩、花崗岩類が貫入している。高圧型の広域変成帯である三波川帯の構成岩は、主に、泥質片岩、砂質片岩、塩基性片岩などの結晶片岩類である。

4.顕微鏡的性質

No.41

岩石名：斑状細粒花崗岩

等粒状組織：径0.5～1.0mm

石英、カリ長石（微斜長石）、斜長石（灰曹長石）、黒雲母

斑状組織：最大径5.5mm、斜長石（中性長石）

変質：斜長石…やや黒雲母化、黒雲母…一部加水・綠泥石化、カリ長石…汚濁

No.42

岩石名：石英斑岩

斑状組織：斑晶（径1.3mm以下）<石基（径1.0mm以下）

斑晶：石英（高温型石英），カリ長石（ハリ長石），斜長石，黒雲母

石基：微花崗岩質組織…石英，カリ長石，斜長石，黒雲母

変質：斜長石…完全に粘土鉱物化，黒雲母…オバサイト・雲母粘土鉱物化

石基…縞状に褐鉄鉱化

No.89

岩石名：細粒花崗岩

等粒状組織：径1.数mm以下

石英，カリ長石（微斜長石），斜長石（灰曹長石），黒雲母，普通角閃石

変質：斜長石…やや網雲母化，黒雲母…大部分綠泥石・加水・白～網雲母化，カリ長石…汚濁

有色鉱物（黒雲母または角閃石）で，綠泥石～イライトに強変質した部分がある

No.100

岩石名：中粒砂岩

砂質粒子：鉱物片>岩片（径0.2mm～1.0mm）

鉱物片：石英，カリ長石，斜長石，黒雲母，綠泥石

岩片：花崗岩類（石英，カリ長石，斜長石の2種以上の組み合わせ），頁岩，

泥質片岩（網雲母石英片岩），シルト質ホルンフェルス，珪岩

比較試料（採取地：吾北村上八川袖ノ木野，上八川川の西岸）

岩石名：石英斑岩

斑状組織：斑晶（径1.1mm以下）<石基（径1.0mm以下）

斑晶：石英（高温型石英），カリ長石（ハリ長石），斜長石（灰曹長石），黒雲母

石基：微花崗岩質組織…石英，カリ長石，斜長石，黒雲母

変質：斜長石（斑晶の）…粘土鉱物化，黒雲母…網雲母・粘土鉱物化，石基…縞状に褐鉄鉱化

5.考察

No.100が砂岩であり，種々の岩片や鉱物片が膠結されてできた岩石である。砂岩はいろいろな地質帯にごく普通に分布する岩石なので，上記の鑑定結果だけからではどの地質帯に由来するか判定できないが，秩父累帯北帯に分布する砂岩が源岩であるとみなしてもおかしくはない。

これに対し，No.41，No.42，No.89は火成活動に由来する花崗岩類である。No.41，No.42，No.89の石製品と外観が似た石は，現在でも仁淀川の川原で見ることができるので，これらの石は仁淀川より採集されたと考えるのが自然であろう。仁淀川流域に分布する花崗岩類としては，上八川－池川

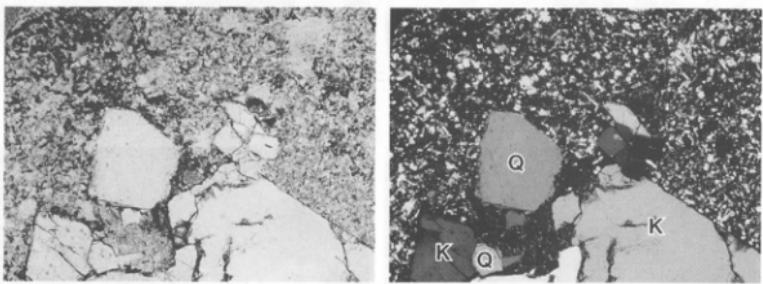
構造線に沿って貫入したものと、三滝火成岩類がある。三滝火成岩類は、鉱物が細粒化したり石英が波動消光するが、No.41, No.89ではそのような特徴が観察されないため、三滝火成岩類とはみなされない。No.41, No.89の鉱物構成は、むしろ上八川-池川構造線に沿って貫入した細粒花崗岩の特徴を備えている。

一方、No.42は、外觀・顕微鏡的性質ともに、比較試料として採取した上八川の露頭の岩石と酷似している。とくに、石基が縞状に褐鐵鉱化していると記載された両者の特徴は、貫入時の流理構造に関わる特徴であり、No.42の源岩は上八川-池川構造線に沿って貫入した石英斑岩とみなされる。

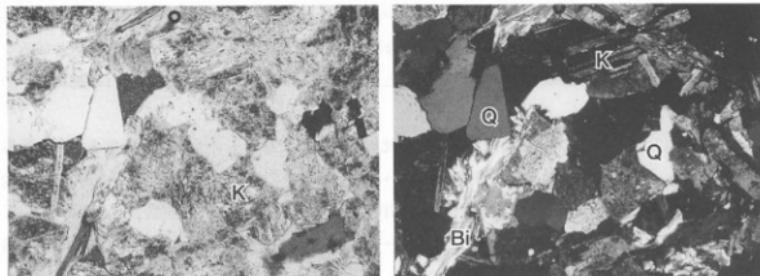
以上より、これら石製品3点の源岩は、上八川-池川構造線に沿って貫入した石英斑岩・花崗岩類と考えられる。

6.参考文献

- 市川浩一郎・石井健一・中川襄三・須鎧和巳・山下昇 黒瀬川構造帯（四国秩父累帯の研究Ⅲ）
地質学雑誌、第62巻、P82-103 1956年
須鎧和巳・岩崎正夫・鈴木亮士編 日本の地質8 四国地方 共立出版 1991年
鈴木亮士 四国はどのようにしてできたか-地質学的・地球物理学的考察- 南の風社 1998年

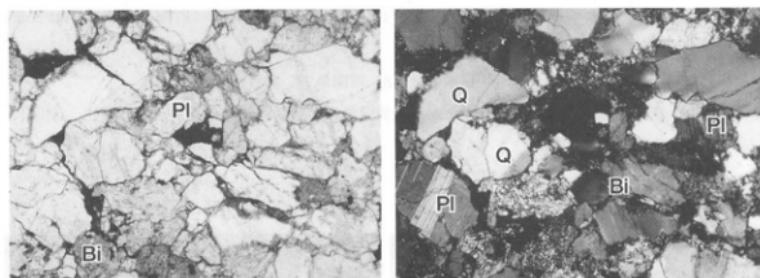


No.42 石英斑岩 (左: 単ニコル、右: 直交ニコル・×20)
Q : 石英、K : カリ長石



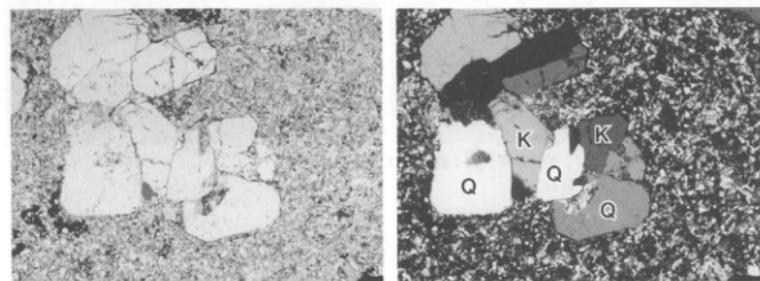
No.89 細粒花崗岩（左：単ニコル、右：直交ニコル・ $\times 20$ ）

Q：石英、Pl：斜長石、K：カリ長石、Bi：黒雲母



No.100 中粒砂岩（左：単ニコル、右：直交ニコル・ $\times 40$ ）

Q：石英、Pl：斜長石、Bi：黒雲母



比較試料 吾北村上八川袖ノ木野 石英斑岩（左：単ニコル、右：直交ニコル・ $\times 40$ ）

Q：石英、K：カリ長石

付編 2

バーガ森北斜面遺跡から出土した炭化物の年代と樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

仁淀川右岸に位置するバーガ森北斜面遺跡（標高145.3m）は、弥生時代中期末の高地性集落跡として知られている。今回行われた発掘調査により、I区において炭を含む土坑（SK-1）が検出された。発掘調査所見によれば、SK-1は黄褐色漂質砂層（II層）下で検出され、覆土は炭状の黒色土であり、焼土や炭化物が含まれていることや遺構が高台で確認されていることなどから狼煙台跡ではないかと考えられた。SK-1の構築時期については、共伴遺物がないために詳細は不明とされるが、弥生土器や石包丁が出土する層位が、SK-1直上のII層につながると考えられたため、弥生時代以前と推定された。

本報告では、SK-1から出土した炭化材の年代測定を実施し、遺構の構築年代に関する資料を得ることを目的として放射性炭素年代測定を行う。また、炭化材の樹種同定を行い、燃料材の用材に関する資料を得るために炭化材同定を行う。

1. 試料

試料は、SK-1から出土した炭化材（試料名：SK-1出土、No.1炭）である。炭化材は一括採取されたもので、試料の接合関係を調べた結果、合計16個体に分けることができた。樹種同定はこの16点全てについて行い、年代測定は比較的径の大きい試料と枝のような試料から2点を選択した。

2. 方法

(1) 放射性炭素年代測定

a) 前処理

乾燥、粉砕したものを水に入れて、浮上してきたものを除去した。次に水酸化ナトリウム溶液で煮沸した。室温まで冷却した後、水酸化ナトリウム溶液を傾斜法で除去した。この作業を除去した水酸化ナトリウム溶液の色が薄い褐色になるまで繰返した。次に濃硝酸を加えて煮沸した。室温まで冷却した後、傾斜法により除去した。充分水で洗浄した後、乾燥して蒸し焼き（無酸素状態で400℃に加熱）にした。蒸し焼きにした試料は純酸素中で燃焼して二酸化炭素を発生させた。発生した二酸化炭素は捕集後、純粋な炭酸カルシウムとして回収した。

b) 測定試料の調製

前処理で得られた炭酸カルシウムから真空状態で二酸化炭素、アセチレン、ベンゼンの順に合成した。最終的に得られた合成ベンゼン3ml（足りない場合は、市販の特級ベンゼンを足して3mlとした。）にシンチレイターを含むベンゼン2mlを加えたものを測定試料とした。

c)測定

測定は、1回の測定時間50分間を20回繰返す計1,000分間行った。未知試料の他に、値が知られているスタンダード試料と自然計数を測定するブランク試料と一緒に測定した。

d)計算

放射性炭素の半減期としてLIBBYの半減期5,570年を使用した。

(2)樹種同定

木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

3.結果

(1)放射性炭素年代測定

測定結果を下表に示す。

試料名	試料の質（径：樹種）	年代順	誤差		Lab No.
			+	-	
SK-1出土, No.1炭	炭化材（大径：アカガシ亜属）	560	210	200	PAL-274
	炭化材（小径：アカガシ亜属）	630	230	220	PAL-275

注：年代値：1950年を基点とした値

(2)樹種同定

炭化材は、16点全てがコナラ属アカガシ亜属に同定された。解剖学的特徴などを以下に記す。

・コナラ属アカガシ亜属 (*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*) ブナ科

放射孔材で、管壁厚は中庸～厚く、横断面では梢円形、単独で放射方向に配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高のものと複合放射組織がある。

4.考察

(1)年代値について

年代測定値は、大径の試料が560y.B.P.であった。小径の試料が630y.B.P.であった。炭化材試料は、一括採取された中から接合関係を確認して16個体を確認した。放射性炭素年代測定は、その中から大径のものと小径のものを各1点選択した。したがって、試料は同一個体の異なる部位に由来する可能性もある。樹齢の問題（東村、1990）などを考慮すれば、2点の年代値はほぼ一致しているといえる。

年代測定値を曆年代に換算すると、鎌倉時代末～室町時代初頭に相当し、発掘調査所見として示唆されている土坑の推定年代である弥生時代以前とは大きく異なっている。年代値が推定値よりも

新しい場合、後代の試料の混入や再堆積、毛根などの混入による可能性が考えられる（東村、1990）。今回の試料の場合、顕微鏡で観察した限りでは毛根の混入は認められない。また、遺構が現地表面下約30~40cmと浅く、覆土は湿った状態であったことから、雨水あるいは地下水などの影響により測定試料が汚染された可能性もある。今後の発掘調査によりSK-1と同一時期と考えられる遺構が確認され、覆土より炭化物などが出土した場合には放射性炭素年代測定を試みて、今回の測定結果を再評価することが課題として残される。

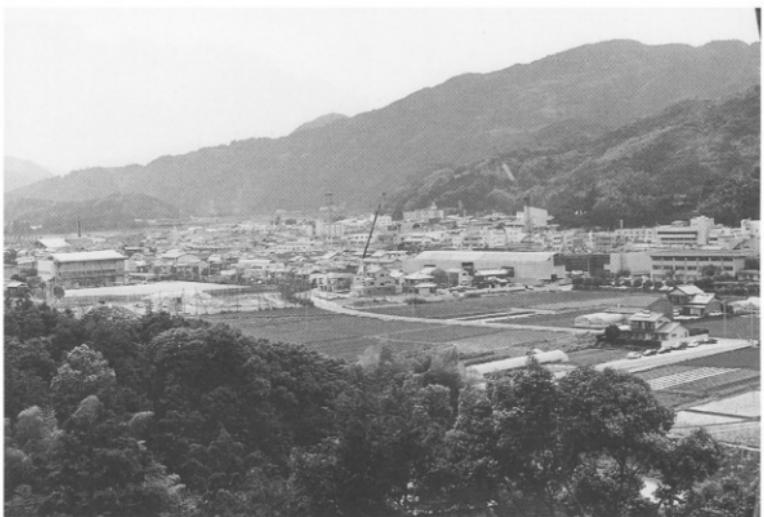
(2)用材選択について

出土した炭化材は、SK-1の燃料材の可能性が考えられている。アカガシ亜属の木材は、薪炭材として優良であり（平井、1979），とくに高温を必要とする場合に適している。燃料材の目的・性格については詳細が不明であるが、1種類のみしか確認できないことから、アカガシ亜属の木材が選択的に利用された可能性がある。しかし、試料は同一個体に由来する可能性もあり、今後さらに試料を蓄積して傾向を把握したい。

引用文献

- 東村武信（1990）改訂 「考古学と物理化学」 212P 学生社
- 平井信二（1979） 「木の事典」 第2巻 かなえ書房

写 真 図 版



I-A区より北西方面を望む



I-A区より北東方面を望む



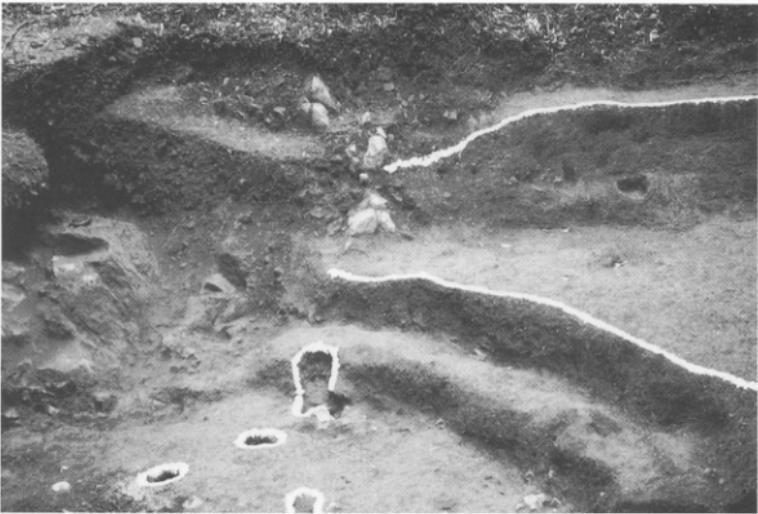
I区遠景



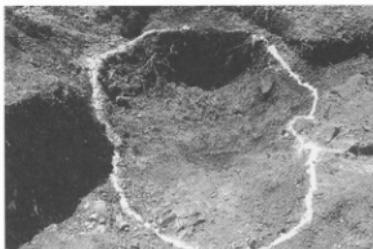
調査区全景（航空写真）



S T - 1 完掘



S T - 2 完掘



I-A区 SK-1



I-A区



I-A区



I-A区 東壁セクション



I-A区



I-B区 南壁セクション



I-B区・C区



I-C区



I-C区 完掘



I-C区 西壁セクション



I区作業風景



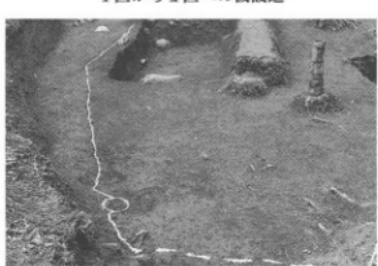
I区からII区への仮設道



I区からII区への仮設道



II-A区 調査前



II-A区 ST-1検出



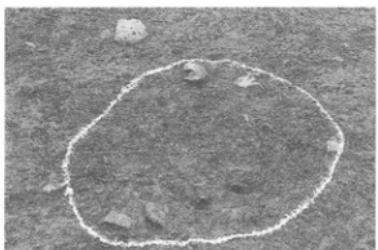
II-A区 南壁セクション



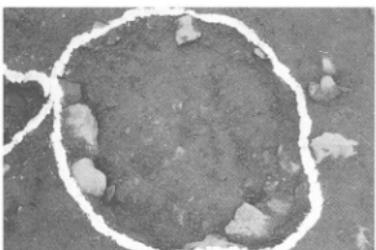
II区作業風景



II-A区 ST-1



ST-1 P-1 検出



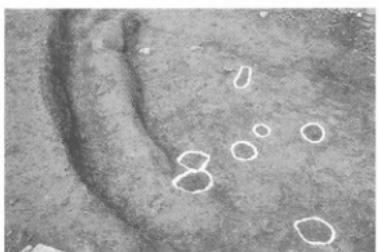
ST-1 P-1 完掘



ST-1 P-2 完掘



II-A区 ST-2 検出



ST-2 ピット群



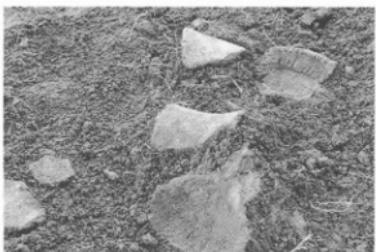
II-B区 完掘



II-C区 下段調査前

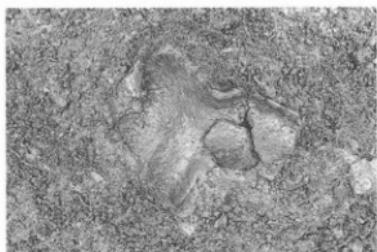


II-C区 上段調査前



遺物出土状況





遺物出土狀況



4



5



15



31



56



21

弥生土器（壺・高杯）



35



36



60



61

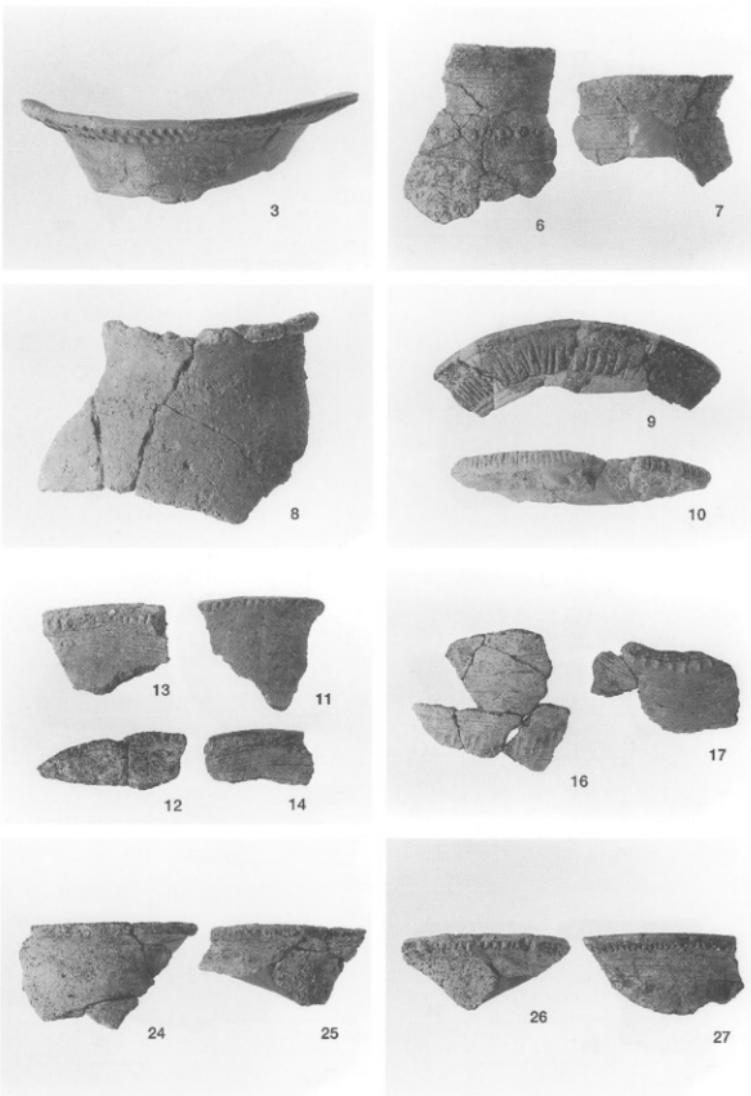


71

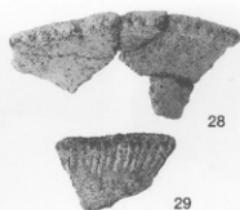


72

弥生土器（甕）・石鍤



弥生土器（壺）



28
29



30



32



34



43



44



45

46



53



54



55

弥生土器 (壺)